

暗示シテ居ル。屈折力ハ Zeiss ノ機械ヲ測定シタガ對照タル菌ヲウエナイ「ブイヨン」ハ日ヲ逐フテ屈折力が大ナルガ(R_B)菌ヲウエタモノハ8日頃マテ急ニ弱クナル(R_T)。コノニツノ讀ミノ差(R_B-R_T)ト Lf 單位。發育菌量ノ曲線ハ大體似カヨツタモノテ Lf/R_B-R_Tハ數日ノ實驗ニ於テ略々一定シ10前後デアツタ。即チ R_B-R_Tニヨリ Lf 單位ノ見當

ラツケルコトが出来ルガ Taylor ノ「ブイヨン」ニ P.W. 8ヲウエタ場合ノミノコトデアリ何モ Ramon-flocculation ヲ屈折力測定テオキカヘルノガコノ研究ノ目的デハナク「ヂフテリア」程 in vitro ニ測定ノハツキリシナイ他ノ毒素ニ應用出來ハシナイカト云ツテ居ル。
(清水)

雜 報

第81回講習會終了式

舊臘12月12日(土)午前10時半ヨリ講堂ニ於テ第81回講習會(公衆衛生學)終了式ガ舉行サレ。所長ヨリ一場ノ訓示ガアツタ。

學術集談會

舊臘12月24日(木)午後1時ヨリ講堂ニ於テ學術集談會ガ開催サレ演題ハ次ノ如クデアツタ。

演題

1. 東京市内ニテ捕獲セル家鼠ト「サルモネラ菌」ノ關係(續報)
八田 貞義君
2. 狂犬病病毒ノ培養ニ就テ(續報)
金澤 謙一君
3. 結核ノ化學的療法ニ於ケル金製劑ノ金分子ノ意義ニ就テ
柳 澤 謙君
河 合 榮君
4. 各種藥劑ノ海猴過敏症ニ及ボス影響
中村 敬三君
高橋 義夫君
5. 吾邦ニ於ケル馬ノ流行性腦炎ノ原因學的研究
城井 尙義君
安藤 啓三郎君

佐藤 久藏君
大久保 薰君
中山 富雄君
山田 誠君

6. 結核化學的療法ノ趨勢(綜説)

佐藤 秀三君

新年式竝ニ新年祝賀會

去ル1月6日(月)午前11時ヨリ講堂ニ於テ新年式ガ舉行サレタ。先ヅ「君ガ代」ヲ2唱シタ後。所長ヨリ昨年ニ於ケル主ナル業績及ビ本年ノ計畫。希望等ニ就テ一場ノ挨拶ガアツタ。

續イテ地階假食堂ニ於テ春秋會ノ新年祝賀會ガ催サレタ。

學友會へ寄附

金 38圓 04錢也 小林 茂雄君
金 25圓 96錢也 眞柄 正直君
金 31圓 68錢也 木下 清吉君

人事異動報告

昭和12年1月7日傳染病研究所

發令 辭令 官職 氏名
月日
12.9 研究生入學許可(第一研究部)

清水萬之助

雜 報

學術集談會

去ル1月28日(木)午後1時ヨリ講堂ニ於テ學術集談會ガ開催サレ演題ハ次ノ如クデアツタ。

演 題

1. 牛ノ生殖器トリコモナスニ就テ
第1報 形態及ビ生物學的研究
森下 哲 夫君
2. 日本流行性腦炎免疫馬血清ノ豫防的効果ニツイテ
猿ニ於ケル感染防禦實驗
三田村篤志郎君
羽里彦左衛門君
北岡 正見君
3. 東京市、大阪市及ビ神戸市ノ健康者並ニ非腦炎患者ノ血清ノ日本及セント・ルイス流行性腦炎病毒ニ對スル殺病毒力ノ比較研究
三田村篤志郎君
羽里彦左衛門君
北岡 正見君
渡 邊 漸君
大久保 薫君

學友會へ寄附

一金19圓89錢也

進藤宙二君

一金3圓40錢也

長谷川 秀治君

人事異動報告

昭和12年2月1日傳染病研究所

發令月日	辭 令	官職	氏 名
11年 12. 31	昭和11年12月31日付願研究		高 田 周 平
		生退學ノ件許可ス	
12年 1. 12	依願免本官		技 手 宮 本 正 治
1. 16	昭和12年1月8日付願研究生		石 光 薫
	繼續ノ件許可ス		
1. 13	依願免本官		技 手 齋 藤 堯 夫
1. 13	傳染病研究所業務ヲ囑託ス		齋 藤 堯 夫
1. 12	青森縣下(青森市)へ出張ヲ命ズ		技 手 渡 邊 漸
1. 16	依願免本官		技 手 土 屋 毅
1. 15	陞叙高等官五等		助教授 内 野 豊 生

雜 報

學術集談會

去ル2月25日(木)午後1時カラ講堂ニ於テ學術集談會ガ開催サレ。演題ハ次ノ如クデアツタ。

演 題

1. 夏期腦炎病毒ノ一株(大里株)ニ就テ
金澤謙一君
2. 昭和10年、11年夏期流行セル腦炎ノ病原研究—主トシテ血清ノ「ウィー
ルス」中和能力ニ就テ
高木逸磨君
工藤正四郎君
川喜田愛郎君
3. 向神經性病毒ノ感染經路ニツイテ
(綜説) 三田村篤志郎君

學友會へ寄附

金2圓45錢也 中村敬三君

人事異動報告

- 昭和12年3月2日傳染病研究所
- | 發令月日 | 辭令官職 | 氏名 |
|-------|---------------|---------|
| 2. 1 | 中華民國へ出張ヲ命ス | 教授 佐藤秀三 |
| 2. 1 | 叙從六位 助教授 | 内野豊生 |
| 2. 15 | 任傳染病研究所技手給九級俸 | 八田貞義 |

- | | |
|-------|-----------------------------------|
| 2. 15 | 桑嶋謙夫 |
| 2. 15 | 任傳染病研究所技手給十級俸 |
| | 枋内寛 |
| 2. 15 | 傳染病研究所業務ヲ囑託ス |
| | 木村政長 |
| 2. 15 | 傳染病研究所業務囑託ヲ解ク |
| | 入田貞義 |
| 2. 15 | 桑嶋謙夫 |
| 2. 15 | 枋内寛 |
| 2. 15 | 研究生退學ヲ命ス |
| | 木村政長 |
| 2. 22 | 愛知縣下へ出張ヲ命ス |
| | 技師 城井尙義 |
| 2. 25 | 傳染病研究所業務ヲ囑託ス |
| | 木村次郎 |
| 2. 25 | 昭和12年2月25日付願研究
生退學ノ件許可ス |
| | 金尾秀發 |
| 2. 26 | 兼任臺灣總督府中央研究所技師
叙高等官四等 |
| | 教授 細谷省吾 |
| 3. 1 | 昭和12年2月26日付願研究
生入學ノ件許可ス(第五研究部) |
| | 長谷部一郎 |
| 3. 1 | 陞叙高等官二等 |
| | 教授 小鳥三郎 |

「東京医歯学雑誌」 21 卷 418-420, 1937
(4号)

418

新 文 獻 抄 録

Androstendiol=還元スルコト=成功シタ。

著者等ノ1人ハ Cholestanon(III)ヲ Mamoli 達がヤツタト同ジ方法ヲ還元シヤウトシタガウマク行カナカツタ。ソコテ著者達ハ次ノ様ニ想像シタ。即チ C3 ニアル Carbonyl-Sauerstoff ハ gärende Hefe テ還元サレナイテ、C17 ニアル Carbonyl-Sauerstoff ノミガ還元サレルノデアラウト。

コノ考ヲ確カメルタメニ C3 ト C17 = Car-

bonyl ノアル Δ^4 Androstendion(IV)ニツイテ 實驗ヲ行ツタ。即チコレヲ「アルコール」溶液トシ Hefe テ酸酵ヲ起シテオル Zucker-lösungニ入レテ還元シテミルト Δ^4 -Testosteron(V)ニカヘルコトガ出来タ。 Δ^4 -Testosteron ハ強力ナル男性-hormon テ Butenandt(1936)ニヨツテ、コノモノハ Δ^4 -Androstendion ノ直接還元ニヨツテ体内ニ生ズルデアラウト豫想サレテキタモノデアツタ。(尾澤)

雜 報

學術集談會

去ル3月25日(木)午後1時ヨリ講堂ニ於テ 學術集談會が開催サレ、演題ハ次ノ如クデアツタ。

演 題

1. 紫外線顯微鏡寫眞ニ就テ 野田 省吾君
2. 非經口的ニ注入セル諸臟器細胞成分ノ血小板ニ及ボス影響ニ就テ 中村 茂一君
3. ECG ノ實驗的研究(第2回報告)
{柳澤 謙君
安藤啓三郎君
4. 脂肪酸類ノ立體化學構造ト細菌ノ生理作用トニ就テ 鐵本 總吾君
5. 牛痘毒、疱疹病毒間ニ免疫學的關係アリヤ 金澤 謙一君
6. 牛痘毒及ビ同免疫血清ヲ以テスル共働免疫法(Simultaneous Immunization)ノ效果ニ就テ 矢追 秀武君
7. 夏期腦炎毒馬體接種成績
{城井 尙義君
佐藤 久藏君
大久保 薫君
安藤啓三郎君
中山 富雄君
市川 收君
山田 誠君

第82回講集會開催

去ル4月13日(火)午前10時ヨリ講堂ニ於テ第82回講習會(傳染病學)開講式ガ舉行サレ、所長ヨリ一場ノ訓示ガアツタ。

學友會ニ寄付

金3圓87錢也 {柳澤 謙君
河合 榮君
金278圓99錢也 岡本 正三君
金4圓22錢也 鐵本 總吾君

人事異動報告

昭和12年4月6日傳染病研究所

發令月日 辭 令 官職 氏 名
2.27 依願免本官 技 手 山岡 克巳
,, 衛生技師ニ任ス(警視廳)
同
高等官七等ヲ以テ待遇セラル
3. 3 愛知縣下へ出張ヲ命ス
技 師 城井 尙義
,, 歐米各國へ出張ヲ命ス
囑 託 木村 次郎
3. 9 任侍醫頭兼侍醫 囑 託 入田善之進
敘高等官二等
賜三級俸
3.15 敘正五位 教 授 小島 三郎
3.23 朝鮮へ出張ヲ命ス

	(仁川出張所) 嘱託 山田 誠	„	昭和12年3月31日付願研	
3.30	宮城縣下へ出張ヲ命ス		研究生退學ノ件許可ス	中村 茂一
	(仙臺市へ) 教授 小島 三郎	„	陸軍高等官三等教授	細谷 省吾
3.30	宮城縣下へ出張ヲ命ス	3.30	宮城縣下へ出張ヲ命ス	
	(仙臺市へ) 技師 遠山 祐三		技手 山岸 精實	
3.31	依願免本官 技手 川瀬 五郎	„	„	嘱託 安川 隆
„	研究期間滿了ニ付退學	„	„	同 鐵本 總吾
	陸軍委託研究生 小沼 信夫	4. 1	研究生入學 陸軍委託研究生	田部邦之助
„	右同 海軍委託研究生 河合 榮	„	敘從四位 教授	佐藤 秀三
„	昭和12年3月31日付願	„	陸軍高等官一等	„ 同 人
	研究生退學ノ件許可ス 花室 憲章			

高田論文 正誤表

(實驗醫學雜誌第二十一卷第三號)

	誤	正
197頁	5行目 Bergoy	Bergei
215頁	24行目 Cl. chanvoei	Cl. chauvoe
216頁	8行目 人々がアルが余(……)	人々(Weinberg 及 Prevot 又ハ Turner)がアルが余……
232頁	18行目 免疫元性ノ次ニ右ノ如キ句ヲ插入	免疫元性ノ減弱ヲ來ス可ク之反好氣性菌「ツクチン」ノ滅菌ノ如ク 53°乃至 65°C 30分ノ加熱ヲ行ヒタルモノハ……
235頁	13行目 Du serum antioedematicus	Du sérum anti-oedematiens

A. G., Contributions to the mathematical theory of epidemics. IV. Analysis of experimental epidemics of the virus disease mouse ectromelia, Jour. Hyg., 1937, XXXVII, 172-187.)

著者等ハ Greenwood 等カ實驗的ニ流行セシタル二十日鼠ノ「エクトロメリア」症ニ就テコレヲ數學的ニ分析シタガ。特ニ生存期間ニ就テノ統計的觀察ニ重點ヲ置イテ居ル。實驗ノ第一ノモノニ於テハ最初ノ潜伏期間ヲ除キ、一定ノ數ダケカ生存シテ行ク事實ガ4ツノ恒數ヲ使用シテ算出セラレタ公式トヨク一致シテ居ル。然カシ第二ノ實驗ニ於テハ公式ノ當テハマリ方ガ第一ノモノニ比シテ明カニ劣ツテ居タ。第一及ビ第二ノ實驗ヲ綜合シテ見ルト、被感染性ノ動物ニ向ツテ常ニ一定ノ比率ヲ保テツ、感染が見ラレル事カ明デアル。マタ時ニ小サイ動搖が見ラレルガコレハ Brownlee カ麻疹ニ際シテ假定シタ週期性ノ動搖デハナク、全ク不規則性ノモノデアル。

(渡邊)

スペインニ於ケル皮下種痘ノ實施ニ就テ

Gallardo, E. and Sanz, J., Subcutaneous smallpox vaccination with bacteria free vaccine, Amer. Jour. Hyg., 1937, XXV, 354-361.

著者等ハ組織培養中ニ培養セラレタ痘毒、鶏卵内培養セラレタル痘毒及ビ粗痘ヲ「ベルケエフェルド」V濾過器テ濾過セルモノヲ各々新鮮ナモノ及ビ乾燥保存セルモノトシテ總計8960人ニ對シ皮下種痘ヲ行ツタガ。ソノ善感率ハ最良ノ痘苗ニ依ル皮膚接種ト同程度ノ結果ヲ收メ得タガ。コノ際ノ全身的及ビ局所的ノ副作用ハ皮膚接種ノ場合ニ比較シテ輕度ニ止マツタ。マタ皮下注射ニ依ル免疫性モ皮膚接種ノ場合ト同様ニ確實且ツ持續性デアル。且ツ皮下注射テ陰性ニ終ツタ場合ニモアル程度ノ免疫體ノ出現ハ每常認メラレタ所デアル。

(渡邊)

雜 報

學術集談會

去ル4月22日午後1時カラ講堂ニ於テ學術集談會カ開催サレ。演題ハ次ノ如クデアツタ。

演 題

1. 近代高層建築ノ環境學的研究 (第1報)

空氣イオン量ノ消長ニ就テ

宮本 正治君

2. 東京市内家鼠ト「サルモネラ」菌屬トノ關係(續報)

家鼠ヨリ分離セル S. bareilly

ニ就テ

八田 貞義君

3. 鳥類マラリアニ關スル二三

ノ觀察

中島 五六君

4. 補體結合反應ニヨル結核ノ血清學的診斷法ニ關スル研究

4. 諸種結核抗元ノ批判

5. 使用抗元量ノ檢定法竝ニ Browning 氏補體結合反應ノ變法ニ就テ

6. Witebsky-Klingenstein-Kuhn 氏補體結合反應ニ

就テ

須賀井忠男君

5. 石炭酸ノ殺菌能力ニ就テ

手塚 悅郎君

- 6. 「コレラ菌ノ試験管内溶菌現象ニ現レル逆比現象ニ就テ

小栗 一好君

「カラアザール病研究團

先般外務省文化事業部ノ事業ノ一部トシテ、傳染病研究所ヲ主體トシ、北支殊ニ山東省ニ於ケル「カラアザール病」ノ流行狀態、豫防方法並ニ治療方法ニ關スル研究ヲ目的トスル「カラアザール病診療研究團」ガ組織サレタガ、當所カラハ佐藤教授ガ團長トシテ、其ノ他ニ山田技師、石井博士、井田、森下、細井ノ3學士ガ參加シ、上海自然科學研究所員、青島及濟南同仁會醫院醫局員等ト共同シテ、5月上旬ヨリ11月上旬ニ至ル迄同地方ニ於テ研究、試験ヲ實施スルコト、ナリ、同氏等ハ去ル5月5日午後3時東京驛發壯途ニ就イタ。

學友會懇親會

去ル5月7、8、9ノ3日間ニ涉リ新潟ニ於テ第11回聯合微生物學會ガ開催サレ、當所カラモ所長以下多數參會、夫々業績ヲ發表シタガ、學會第2日目ノ5月8日午後6時カラ同市西大畑町行形亭テ學友會懇親會ヲ催シ約50名ノ參會者ガアリ盛會デアツタ。

學友會へ寄附

一金 26圓 62錢也 中村茂一君

人事異動報告

昭和12年5月5日 傳染病研究所

發令月日 辭令 官職 氏名

- 4. 9 北海道へ出張ヲ命ス (道廳水産試験所へ) 鮮魚ノ化學的殺菌防腐應用試験ノ爲

技師 遠山 祐三

囑託 鐵本 總吾

- 4. 10 依願免本官

技師 相良 貞直

傳染病研究所業務ヲ囑託ス

同 上

- 4. 21 沖繩縣下へ出張ヲ命ス 學術上取調ノ爲 囑託 石井 信太郎

- 4. 22 山口、佐賀及福岡ノ三縣下へ出張ヲ命ス 學術上取調ノ爲

技師 佐藤 久藏

- 4. 28 新潟縣下へ出張ヲ命ス 新潟醫科大學ニテ開催ノ微生物學會出席ノ爲 教授 宮川 米次

同 三田村 篤志郎

同 助教授 矢追 秀武

同 技師 羽里 彦右衛門

同 技師 城井 尚義

同 技師 安藤 啓三郎

同 同 天神 智

同 同 工藤 正三郎

同 同 柳澤 謙

同 同 佐藤 久藏

同 同 大久保 薰

同 同 北岡 正見

同 同 川喜田 愛郎

同 同 渡邊 漸

同 同 金澤 謙一

同 囑託 福島 伴次

同 同 大林 容二

同 技師 岡西 順二郎

- 5. 5 新潟縣下へ出張ヲ命ス 新潟醫科大學ニテ開催ノ微生物學會出席ノ爲 教授 田宮 猛雄

同 同 小島 三郎

同 技師 川島 四郎

同 同 中込 巨

同 同 清水 文彦

同 同 進藤 宙二

同 同 入田 貞義

同 同 桑嶋 謙夫

同 囑託 大橋 久治郎

同 同 田中正一

 雜 報

「実験医学雑誌」

21; 618-619. 1937

傳染病研究所記念日式辭

宮 川 米 次

記念日ノ設定

過去ノ經驗ノ尊サ

人生ノ百事ヲ遂行スルニ當ツテ最モ大切ナ心掛ケハ、過去ノ貴重ナル經驗ヲ現在ノ參考トナシ、將來ノ指針トナスコトデアリマス。經驗ニ富ンダ成功者ノ言ニ耳ヲ傾ケルノモ全ク此ノ故デアルデアリマス。然シ人ニハ夫々ノ天分ガアリ與ヘラレタル能力ニハ限リガアルデアリマスカラ他人ノ經驗ヲ直チニ己レニ以テ來テ、ソレデ丁度ヨイカトイフニ、サウ許リハ行キ乗ネルコトガ決シテ尠クアリマセヌガ、然シ參考トスルコトハ常ニ出來ルデアリマス。自己ノ履ミ來ツタ經驗ハ之レハ何ヨリモ最モ貴重ナル教訓デアルコトハ此意味カラ申シテモ明ラカナ事デアリマス。

各個人ノ記念日

各個人ニハ可ナリ多クノ記念日ガアリ之レヲ祝福シ、將來ノ幸福安穩ヲ祈ルコトハ古今東西ヲ論ゼズ一樣ニ行ハレテ居ルデアリマス。今茲ニ各個人ノ記念日ニ一寸觸レテ見マセウ。誕生日ヲ祝福スルノハ今日迄ノ安穩ナル發達ヲ喜ビ、長壽ヲ希フトイフ意味ダケデハナクテ、年ニ一度宛心靜カニ過去ヲ追憶シテ、現在ノ認識ヲ新ラタニシ、將來ニ役立セントスルノ意ガ多分ニ含マレテ居リ、禍ヲ轉ジテ福トナシ、福ヲ益々増大發展セシメンコトヲ祈ルデアリマス。

昔ハ男女ニ元服、マラバライノ儀ナルモノガアリマシタ。元服ハ男子15.6歳ニナツタ時ニ行ハレタモノデ、貴人ハ被髮ヲ舉^{ワラハ}ゲ、髮ヲ結ンデ烏帽子親ニヨツテ烏帽子ヲツケテ頂イテ冠者トナツタ。一般ノ武士又ハ庶民ハ之レニ代フルニ前髮ヲ剃リ落シ服ノ袖ニ袖留ヲシタ。斯クシテ一人前ニナツタ事ノ儀式トナシタデアリマス。女子ニハ之レニ代フルニマラバライノ儀ガ行ハレマシタ。ソレハ童女ノ眉毛ヲ抜クカ剃ルコトデ、ソシテ髮ヲアゲ、一人前ニナルコトヲ示シタ儀式デアリマシテ、之レヲ爲スニハ毛抜親(鑷親)ノ手ニヨツテ爲サレタモノデ、相當ニ重大ナル儀式デアルデアツタトイフコトデアリマス。

成年、一般ニ滿20歳ヲ言フテ居ルコトハ昔モ今モ同様デアル、成人ノ意デアリマス。皇室ニ於テハ滿18歳ノ時ニ御成年式ガ行ハレルト承ツテ居リマス。庶民デハ今日ハ

先ヅ成年式ハ行ハレナイガ昔ハ相當盛大ニ行ツタモノデアルトイヒマス。此外還曆、古稀、喜壽、米壽等々ノ賀ハ昔モ今モ行ハレテ居リ。何レモ記念日ト見做シテモヨイモノデアリマス。近來結婚記念日ニ色々ナ名稱ヲ附ケテ夫婦生活ノ認識ヲ新ラタニシ其幸福ヲ祈ツテ居リマス。即チ鐵婚(5年目)、銅婚(15年目)、銀婚(25年目)、金婚(50年目)、「ダイヤモンド」婚(75年目)等々ガソレデアリマス。或ハ後來「ラヂウム」婚ナト言フモノガ出來ルカモ知レマセヌ。

國ノ記念日

各國ニハ夫々多クハ記念日ヲ持ツテ居リマス。吾國ニハ神武天皇御即位ノ日タル2月11日ヲ紀元節トシテ居ルコトハ申ス迄モアリマセヌ。隣邦支那ニ於テハ中華民國ノ誕生ノ第一聲ヲ放ツタ10月10日(1911年)ヲ双十節又ハ國慶記念日ト致シテ居リマス。建國25年目ノ1936年ニハ南北ガ統一セラレタトシテ双十節ニハ盛大ナル祝典ノ舉ゲラレタコトハ諸君ノ御承知ノ通りデアリマス。滿洲國ニ於テハ康德皇帝ノ御即位ノ3月1日ヲ建國記念日トナシテ居リ。本年ハ正ニ建國5年トナルノデアリマス。歐米諸國ニ於テモ多クハ國ノ記念日ガアリマスガ、其内デモ特ニ有名ナノハ米國ノ7月4日ノ獨立記念日 Independence day(1776年 George Washingtonガ獨立ヲ宣言シタ日)、佛國デハ「バスチュ」 Bastille ト稱シ7月14日ヲ記念日トシテ祝福シテ居リマス。Bastilleハ監獄ノ名デ、1789年本監獄ヲ破壊シテ、國事犯人ヲ解放シテ第一革命ノ發端ヲ爲シタ日デアルト承ツテ居リマス。キャナダハ7月1日(若シ日曜日デアレバ2日)ヲドミニオンデイ Dominion day トナシテ居ル。英國、伊太利、「ナデー」前ノ獨逸等ハ國王ノ誕生日ヲ祝日トシテ居リマス。兎ニ角此ノ國家的大記念日ニ際シ、國民一同ガ過去ヲ追憶シ、其向上發展ヲ祝福シ、國家ニ對スル認識ヲ新ラタニシテ居ルノデアリマス。

東京帝國大學ノ記念日

東京帝國大學ハ從來帝國大學令ノ發布ニナツタ3月1日(明治19年)ヲ以テ之レニ當テ、居リマシタガ、本年(昭和12年)ヨリ4月12日ニ改正ニナツタノデアリマス。此ノ日ハ東京開成學校ト同醫學校トガ合併(明治10年)シテ東京大學ト稱シタ日デアルノデアリマス。

傳染病研究所記念日

吾ガ傳染病研究所ニハ從來記念日ナルモノガアリマセナンダガ、本年ヨリ6月1日ヲ記念日ト定メ年中行事トシテ式典ヲ舉ゲ、所員一同ガ一堂ニ會シテ過去現在ニ對スル認識ヲ新ラタニシ、吾等ノ使命ヲ完全ニ達成シ、世ノ期待ニ添ヒタイト願フノデアリマス。私ハ茲ニ6月1日ヲ記念日トシテ選ンダ理由ヲ聊カ述ベテ後來ノ參考ニ供シ

タイト思フモノデアリマス。

官立傳染病研究所が創立セラレマシタノハ明治32年3月1日デアリマス。之レニ先ズル8年即チ明治25年11月30日ニ既ニ私立衛生會ニ附屬シテ私立傳染病研究所ナルモノが創立セラレ。之レガ國立トナル迄。年々國家ノ補助ヲ受ケ。ソシテ芝公園ノ内務省ノ地ヲ借用シテ。借家ニヨツテ其作業ヲ爲シテ居タトイフコトデアリマス。國立傳研ノ創立ノ當時ニ於テハ醫學ノ研究ガ其業務ノ主體デアツタノデアリマスガ。明治38年3月28日ニ官制ガ改正セラレテ免疫血清。痘苗製造ノ作業ヲ開始シ。官立血清藥院及ビ痘苗製造所ハ廢止セラレ。傳研ノ業務ハ略々現在ノソレノ様ニナツタノデアリマスト同時ニ。芝公園内ノ研究所ハ狹隘ヲ告グルニ至ツタノデ明治38年6月ニ現在ノ地ニ新築ノ工ヲ起シ。翌39年6月ニ全ク竣工ヲ告ゲタノデアリマス。其後數度ノ擴張ハ行ハレマシタガ震災前迄ハ其當時ノ建物ガ主要ナルモノデアツタノデアリマス。然ルニ大正12年9月1日ノ關東大震災ニ當リマシテ。幸ニ火災ハ免レマシタガ。大破致シマシテ。殆ンド使用ニ堪エラレナクナツテ終ツタノデ急造「バラック」ニヨツテ作業ヲ爲スノ止ムナキニ至ツタ事ハ諸君ノ御承知ノ通りデアリマス。斯クアルコト約12年間。昭和9年6月ニ至リマシテ現在ノ新廳舎ノ竣工ヲ見。茲ニ移轉スルコトガ出來タノデアリマス。即チ現在ノ廳舎ハ昭和6年6月ニ起工セラレ。同9年4月ニ至リ主要部分ノ竣工ヲ見。5月ヨリ「バラック」生活ヲ捨テ約1ヶ月間ヲ要シテ移轉ヲ完了シ。6月16日ニハ長與先生ノ胸像除幕式ト共ニ形バカリノ祝典ヲ舉ゲタノデアリマシタ。御承知ノ通り其當時ハ病院部ノ大半ハ第二期工事トシテ殘サレマシタガ。引キ續キ工事ノ進行ヲ見マシテ。昨年(昭和11年)12月ニ至リマシテ全部完了シテ。附屬醫院ノ全部モ新屋舎ニ移轉スルコトガ出來。名實共ニ復舊復興スルニ至ツタコトハ欣快ニ耐ヘマセヌ。此様ニ6月ナル月ハ傳染病研究所ノ過去及ビ現在ニ於テ極メテ因縁アル月デアリマシテ私ハ此ノ月ノ第一日ヲ記念日トシテ選ンダ次第デアリマス。

傳染病研究所官制ノ變遷

官立傳染病研究所ノ創設セラレタノハ明治32年3月デアリ。醫學ノ研究ニ加フルニ血清。痘苗ノ作業ノ加ハツタノハ同38年3月ノコトデアツタコトハ前ニ既ニ申シ述ベタ通りデアリマス。其後數度ノ官制改正ヲ見タノデアリマスガ。其内重要ナル二。三ノ點ノミヲ申シ述ベルコト、致シマス。大正3年10月ニハ内務省ヨリ文部省ニ移管トナリ。大正5年3月ニハ東京帝國大學ニ附置セラレテ今日ニ及ンデ居ルノデアリマス。創立當時ノ經常豫算ハ數萬圓ヲ出デナカツタモノデアラウト想像シマスガ。ソレヨリ次第ニ擴張セラレ部制モ確立セラレ。昭和2年9月ニハ現在ノ所員制度ニ一轉

シタノデアリマス。今所員及ビ經費ノ増加ノ状態チ一言シマスト。大正5年(創立第18周年)ノ當時ニハ技師7、有給技手20、無給技手20其他判任官6、所員合セテ200、經常豫算23萬圓デアツタノデアリマス。然ルニ昭和12年(創立第39周年)ニ於テハ教授、助教授通ジテ12人、技師4、技手49、事務官1、書記其他判任官13、囑託65、研究生50ガ研究作業ノ主體トナルノデアリマシテ、略々200人デアリマス。雇傭人ノ數ハ約300人デアリマシテ8個ノ研究部4個ノ特別研究室、百有餘名ヲ收容スル附屬醫院ト有シ500ノ人員ガ活動シ、經常豫算ハ約70萬ニ達シテ居ルノデアリマス。

傳染病研究所ノ使命

私ハ此記念日式典ノ施行ノ第一回ニ當リマシテ、吾ガ研究所ノ使命ヲ官制ノ命ズル所ニヨツテ、認識ヲ新ラタニシタイト思フノデアリマス。本所官制ノ第二條ニハ「傳染病研究所ハ傳染病其他病原ノ檢索、豫防治療方法ノ研究、豫防消毒治療材料ノ檢査傳染病研究方法ノ講習並ニ痘苗血清其他細菌學的豫防治療品ノ製造及ビ檢定ニ關スル事務ヲ掌ル」トアル如ク其使命中、最モ大切ナルモノハ傳染病其他病原不明ノ疾患ノ病原研究、延イテハ豫防治療方法ノ研究ニアルノデアリマシテ、其他ノ事項ハ多クハ之レニ附隨シ、必然的ニ生ズル事柄デアルト申シテヨイノデアリマス。即チ吾々ノ使命ハ醫學ノ難關ニ向ツテ堅忍不拔ノ精神ヲ持シテ突破解決セントスルニアルノデアリマス。五百ノ所員ハ互ニ手ヲトツテ作業上ノ苦樂ヲ共ニシ、世界醫學ノ進運ニ後レザラント努メルノミナラズ、其先頭ニ立ち、世界第一ノ醫學研究所タラント念願シテ居ル次第デアリマス。今日幸ニシテ新廳舎ハ殆ンド完成シ殘ル所ハ小動物舎其他二、三ノモノニ過ギマセヌ、斯カル整然タル所ニ於テ思フガ儘ニ研究ニ没頭スルコトガ出來ル吾々ハ幸福ト申サネバナリマセヌ。感謝セネバナリマセヌ。幸ニモ本所ノ業績ハ年々向上ノ一路ヲ辿リ、注目スベキ多クノ業績ヲ發表シテ居リマス。本所ノ賣品モ年ト共ニ増加シ、其昔ハ僅カニ數種ニ過ギナカツタモノガ、今日ハ3倍ノ多クニ達シテ居リ、世間ノ信用ハイヤガ上ニモ加ツテ來テ居リマスシ、吾々モ亦ヨリヨキモノ、ヨリ新ラシキモノヲ社會ニ提供シテ行キタイト心掛ケテ居リマス次第デアリマス。此様ナ譯デアリマシテ、今日幸ニ新廳舎ハ完成シマシタガ、既ニ狹隘ヲ告グルニ至リマシテ、第二本館ノ増築ヲ計畫スベク餘儀サル、ニ至ツテ居リマス。慶賀シテヨイト存ジマス。

世界醫學研究界ノ展望

私ハ茲デ現在ノ世界醫學研究界ノ動向、特ニ之レハト思ハレル様ナ業績ヲ聊カ展望シテ吾々ノ認識ヲ新ラタニシタイト思ヒマス。

豫防醫學界

傳染病豫防醫學界ニ於テハ Ramon 氏ノ創意ニナル「アナトキシン」及ビ其類似品、Calmette, Guérin 氏等ノ發見ニナル BCG 結核菌ノ應用等ガ特ニ注目スベキ事デアルト思ヒマス。R 氏ノ原法ニヨル「アナトキシン」ハ菌培養ニヨツテ得タ毒素液ヲ單ニ無毒化シタモノデアツタガ爲メニ尙種々ノ缺點ヲ有シテ居タノデアリマス。然ルニ此毒素液内ノ不純物ヲ除イテ、純粹ノ毒素ヲ無毒化シテ豫防界ニ提供シタノハ細谷博士等デアリマス。毒素ヲ精製シ、不純物ヲ除カントスルノハ現在世界ニ於ケル此方面ノ動向ト申シテヨカラウト信ジマス。斯クシテ、反應ヲ感ゼシメ、努メテ大量ヲ一時ニ使用シヤウトシテ居ルノデアリマス。「デフテリア」豫防法ニ於テ、歐米デハ極メテ優秀ナル成績ガ報告セラレテ居ルニ拘ラス、本邦ニ於ケル實地應用上ノ所見ハ甚ダ不可解ノ結果デアリマシテ、豫防接種者ガ罹患率ガ最モ高イト言フ様ナ事實ヲ示シテ居リマシテ、其原因ハ何ニアルカ大ニ檢討スベキ事柄デアルノハ申ス迄モアリマセヌ。

精製痘苗、豫防接種材料内ノ夾雜物ヲ除去シテ純粹ナルモノトナシ、之レヲ使用シヤウトノ企テハ矢追博士ノ手ニナツタ精製痘苗ヲ舉ゲネバナリマセヌ。之レニヨル皮下接種法ハ確カニ1個ノ卓越セル世界的ノ發見デアツテ、大衆醫家ガ之レニ對スル使用法ニ習熟セラル、様ニナツタナラバ、非常ナル好評ヲ博シ、幼兒ヲ利スルコトノ大ナルモノガアルコトハ信ジテ疑ハナイ所デアリマス。此劃期的研究ハ同好研究者ヲ刺戟セズニハ措キマセヌ。類似ノ企テガ、國ノ内外ヲ問ハズ行ハレテ居ル有様デアリマス。之レト同様ノ立場カラ狂犬病豫防接種材料ヲ精製シヤウトノ企テガアリマスガ、尙所期ノ結果ニ達シテ居ナイ様デアリマス。

諸種ノ「リケチア」病、濾過性病原ニヨル諸種ノ疾患ニ向ツテモ豫防接種ヲ試ントスル企ガアリマス。後來此方面ニ研究ガ伸ビテ行クコト、信ジマス。

BCG 菌ノ豫防接種

人類ノ大敵デアリマス結核ノ豫防ニツイテ近時極メテ注目スベキコトハ Calmette, Guérin 氏ノ發見ニ係ル BCG 菌ヲ皮下ニ接種スル方法デアリマス。之レニ關シテハ澤山ノ報告ヲ見テ居リ、本邦ニ於テハ今村博士等ノ所見ガアル。私等ガ本病院ニ於テ精細ナル検討ヲ數年間ニ互ツテ遂行致シマシタ所ニヨリマスト「マンツウ」反應ノ完全ニ陰性ナルモノニハ一定量ノ菌ヲ皮下接種ヲ爲シテモ何等ノ反應ヲ局所ニ起シマセヌ。硬結膿瘍ノ形成ノ如キハ決シテ起リマセヌ。之レニ反シテ「マンツウ」陽性者ニ使用スルト發赤硬結ヲ起シ、屢々化膿致シマス。然シ此膿瘍モ1ケ年位ノ内ニハ治癒シテ殆ンド何等ノ實害ヲ遺シマセヌ。ソシテ結核罹患率ヲ著シク低下サセルコトガ出來ルコトヲ經驗シテ居リマス。此方法ハ佛國等ニ於テ廣ク使用セラル、如ク、本邦ニ

於テモ實施シテ見ルベキモノト思考致シマス。本法ハ申ス迄モナク生ケル殆ンド威力ノナイ結核菌ノ無症狀感染デアツテ、豫防效力ノ發來ハ結核菌ノ重感染ノ稀有ナル事實ニヨルノデアリマシテ、丁度種痘ニヨル天然痘ノ豫防ト同一意義ヲ有シテ居ルモノデアリマス。結核ノ様ニ適確ナル治療法ノナイ疾病ニ對シテ若シ本菌ノ接種ニヨツテ有症感染(例ヘバ「マンツウ」陽性者ノ接種ニ見ル膿瘍形成ノ如キ)ヲ毎回起スモノトシタナラバ、此接種方法ハ禁ジナケレバナリマセヌガ、幸ニ「マンツウ」反應ガ完全ニ陰性デアレバ何等ノ症狀ヲ起サナイト言フコトガ其ノ特點ト申サネバナリマセヌ。結核以外ノ他ノ細菌性疾患又ハ熱性傳染病ニ於テハ今日未ダ BCG 菌ノ様ナモノガ見出サレテ居リマセヌ。例ヘバ「チフス」、赤痢、「リケチア」病、多クノ濾過性病原ニヨル疾患ガソレデアリマス。若シ人アツテ、是等ノ病原體ノ威力ノ低イモノヲ健康者ニ接種シテ、豫防ヲ爲サウトシタナラバ、ソレハ大ナル誤リデアリマス。是等ノ疾患モ結核ト同様ニヤハリ確實ナル治療法ガアリマセヌ。威力ノ低イ病原體デモ、ソレハ既ニ有症感染デアリ、病原體ガ何時威力ヲ加ヘテ來ナイトモ限リマセヌ。カ、ル場合ニ、今日ノ醫學デハ如何トモスルコトガ出來マセヌ。故ニタトヘ輕症ナリトモ有症感染ヲ起ス病原體ヲ用ヒテ、廣ク健康者ニ疾病ノ豫防ヲ爲スコトニハ私ハ贊意ヲ表スルコトガ出來マセヌ。ヤハリ、健康者ニ接種シテモ無症狀感染ヲ起ス BCG 菌ノ如キモノノ發見ガ一日モ早カラコトヲ祈ツテ止マナイモノデアリマス。

治療醫界ヲ一瞥シテ見タイ。

肺結核ノ外科的療法、治療醫界ニモ近時注目スベキ事項ハ相當澤山ニアリマスガ、私ハ其一、二ヲ申シ述ベルコト、シマセウ、先ヅ第一ニ肺結核ノ外科的療法ニ指ヲ屈セネバナリマセヌ。氣胸、油胸、「パラフィン」頰充、胸廓整形、橫隔膜神經捻除、「スカレノトミー」、肋膜癒著切除等々ガソレデ、之レニ適當ナル內科的療法ヲ併用スルト著ルシイ治療效果ヲ舉ゲルコトハ内外多數ノ文獻ニ徴シテ明ラカデアリマス、私等モ幸ニ新廳舎ニ於テ外科治療室ヲ新設致シマシテ、可ナリ多數ノ病者ニ實施シテ、治療成績ヲ一變セシメルコトガ出來タト信ジマス。

無鹽食餌療法、Gerson 氏等ノ創意ニナル本療法ガ皮膚結核ニ卓越セル治療效果アルコトハ何人モ疑マセヌノニ、肺結核其他內臟結核ニハ左程ノ效果ガ認メラレナイノハ何故デアリマセウカ、殘サレタ事項デアリマスト同時ニ其治療效果ヲ齎ラス機轉ハ何ニアルカモ研究スベキ事項ト信ジマス。

組織ノ轉調療法、先ヅ第一ハ黴毒ニ對スル發熱療法デアリマス。以前ハ腦黴毒、特ニ麻痺狂脊髄癆等ニ限ツテ使用セラレタノデアリマスガ、何レノ時期ノ黴毒症ニモ治

療效果ノアルコトが知ラレテ居リマス。之レヲ藥劑療法ト併用スルコトモ考慮スベキ事項デアリマス。ソシテ治癒機轉ハ組織性狀ノ轉調ニアルモノト見做スベキモノデアリマスガ、又如何ナル具合ニ轉調スルカハ全ク明ラカデアリマセヌ。近時短波長ニヨル治療法モ醫界ノ寵兒トナツテ居ルト申シテヨイト思ヒマス。10m以下ノ發熱作用ノナイモノ。ソレ以上ノ發熱作用ノアルモノ等が使用セラレテ居リマス。其作用機轉モ組織ノ轉調ニアルト思ヒマスガ、如何ナル工合ニ轉調スルカハ全ク不明デアリマス。例ヘバ高血壓症ニ短波長照射ヲ爲スト。タトヘ一時的デアルニセヨ血壓ハ可ナリ下ツテ來ル。ソレハ何ニヨツテデアルカノ點ガソレデアリマス。此外 α 、 β 、 γ 線等々ノ治療效果モ非常ナル注目ノ的トナツテ居リマス。以上ノ外新藥新製劑ガ雨後ノ筈ノ如クニ現ハレテ居リマスガ、茲ニハ此點ニハ立ち入ラナイコト、致シマシタ。

生化學ノ方面

此方面ニ於テハ「ヴィタミン」ト「ホルモン」ノ研究ガ斷然頭角ヲ現ハシテ居ルト思ヒマス。然シ其研究ノ大半ハ歐米人ノ手ニナルモノデ、本邦學者ハ之レニ追從シテ居ル形デアルコトハ遺憾デアリマスガ、然シ一、二ノ注目スベキ研究ガアリマス。ソレハ鈴木氏ノ「ヴィタミン」B、古武氏ノ「ヴィタミン」Cニ關スル研究ガソレデアリマス。「アウトホルモン」ニ關スル研究ハ近時益々内外ノ學者ニヨツテ追究セラレ、新知見ガ加ツテ行クコトハ愉快ニ耐ヘマセヌ。

細菌ハ「ヴィタシン」ノ供給源カ、「ヴィタミン」Bガ酵母ニヨツテ作ラレ、Aハ黄色色素ヲ產生スル細菌ヨリ得ラレルコトハ周知ノ事實デアル。其他ノ種類モ細菌ト深イ關係ガアルノデハナカラウカ。土中ノ細菌ガ「ヴィタミン」ヲ作り之レヲ植物ニ與ヘ動物ハ植物ヨリ之レヲ受ケテ居ル。無菌ノ土壤ニハ植物ハ育タナイ。人が生レルト1,2日デ、腸内ニハ盛ンニ細菌ガ繁殖スル等々ノ事ヲ思フト、生物ハ細菌ト離ルベカラザル關係ガアリ、細菌ガナケレバ生物ハ生き得ナイト言フコトニナルノデハナカラウカト迄思ハレナイデモアリマセヌ。

病原體ノ研究

近時細菌性疾患ニツイテハ注目スベキ病原體ニ關スル研究ハナイガ、濾過性病原、「リケチア」病ニツイテハ益々多クテ加ヘルニ至ツタ。而カモ是等ニヨツテ齎ラサル、人獸ノ疾患ハ細菌性ノソレニ劣ラナイ位澤山ニアリ極メテ重大ナルモノガアルコトガ知ラレテ、此方面ノ學者ノ注意ハ湧然トシテ注ガレテ來タコトモ當然ノコト、信ジマス。「リケチア」病トシテハ恙蟲病、發疹「チフス」、地方性發疹熱、米國ニアル紅斑熱、等々ガアリ、濾過性病原ニヨル人類ノ疾患ニハ天然痘、狂犬病、流行性腦炎、麻疹、

「インフルエンザ」、寒冒、第四性病等々數へ來ツタラバ二十種類ニモ上リマセウ。而カモ極メテ怖ルベキ多クノ疾患ガアル。麻疹、「インフルエンザ」ノ如キハ何人ト雖モ之レニ罹ラナイモノハナイ位デアアルノニ。其病原ノ研究ハ餘リ進ンデ居ナイ。天然痘ノ病原體ハ Paschen ノ發見ニ係ル小體ノソレデアアルコトハ何人モ異論ガナイ様デアアルガ、狂犬病ニ至ルト未ダ混沌トシテ居ル。然シ其ノ大サハ可視性ノ限界ニアルコトダケハ明ラカニナツタ第四性病デハ私等ガ發見シタ小體ハ本邦學者ノ多クハ病原體トスルニ異議ガナイ。歐米ニ於テモ同様ノ所見ガ次第ニ現ハレツ、アル有様デアリマス。谷口博士ノ疱疹ノ病原體ノ研究其他ニ特ニ注目スベキモノガアリ。近時最モ注目セラレテ居ルノハ夏期ニ見ル流行性腦炎ノ病原研究デアアル。主トシテ日本ト米國ニ行ハレテ居ル。本病ガ Economo ノ記載ニナルモノト相違シテ居ルコトヲ發表シタノハ二木博士デアリ。間モナク動物實驗ニ成功シタノハ高木博士デアアル。近時學術振興會ニヨツテ本問題ヲ取り擧ゲラル、ニ至ツテ本邦ニ於ケル研究ハ、一層進捗シ米國ノソレトノ相違モ明ラカニナリ。三田村、山田博士等ニヨツテ蚊ニヨル媒介モ知ラレタ。城井博士ニヨツテ日本ノ馬ニ見ル所謂 Borna 病ハ人類腦炎病原體ト同一デアアルコトガ明ラカニナニツタ様ニ。諸種ノ動物ニ見ル腦炎ノ病原體トノ異同等々多クノ研究ガ殘サレ。特 Economo 型トハ病原的ニ如何ナル關係ガアルモノデアアルカハ知りタイ事柄ノ一ツデアリマス。之レト關聯シテ近時淋巴球性腦膜炎ガヤハリ濾過性病原ナルコトガ知ラル、ト同時ニ、「マウス」、家兎等ニハ不顯性ノ濾過性病原ノ感染ノアルコトナドモ知ラレ。實驗上ニ重大ナル問題デアルト同時ニ動物ノ腦炎病原ノ研究上非常ニ必要ナル事項トナツテ來テ居ル様ニ思ヒマス。

「インフルエンザ」病原ニ關スル研究ハ今日主トシテ英米ニ於テ行ハレテ居リ本邦ニ於テハ實驗動物ノ關係上、英米ノ株ニツイテノ一、二ノ報告ハアルガ、是非本邦固有ノ「インフルエンザ」病原ニツイテ研究シナケレバナラナイノハ申ス迄モアリマセン。

濾過性病原ニヨル疾患ハ人類以外、動物ニモ非常ニ澤山ニアリ。植物ニモ知ラレテ居リ。今後此方面ニ研究ハ大ニ伸ビテ行クベキ性質ノモノト考ヘテ居リマス。

腫瘍ニ關スル研究

腫瘍ノ發生ニ關スル研究上特ニ注目スベキ二、三ノ研究ガアリ。又邦人ノ手ニナツタモノガ多イコトハ愉快ノ極デアリマス。即チ猩紅紅ノ注入ニヨツテ肉腫ノ發生アルコトヲ梅原氏が認メ、「デ・ベンツアントラツエーン」「デ・ベンツピレーン」ノ使用ニヨツテ發癌アルコトハ英人 Kennaway, Cook 氏等ノ發見ニ係リ、「オルト・アミド・アゾトルオール」ノ内服ニヨツテ肝癌ノ發生アルコトハ佐々木、吉田氏が報告シ、今年「バター」黄色素ノ内服ニヨル發癌ヲ木下氏が見出シタコト等ハ極メテ注目スベキコト

デアツテ Virchow ノ刺戟説。山極先生ノ「タール」癌發生機轉ノ解説ニ多少ノ改訂ヲ加フベキ必要ガアルカモ知レナイ様ニ思ヒマス。茲ニ特ニ興味アルコトハ可植性乳嘴腫ノアルコトデアリ米國ノ Shope 等ニヨルト之レヨリ癌ノ發生ガアリ。又茲ニモ濾過性病原體ノ存在ヲ認メテ居ルコトデアリマス。一、二ノ追加的研究ヲ報告セラレテ居ル犬ニ可植性乳嘴腫ノアルコトハ本邦デモ知ラレテ居ルコトデアリ。私モ一、二ノ株ヲ持ツテ居リマス。是等ニモ濾過性病原體ナルモノガ果シテ存在スルヤ否ヤヲ考フル時ニ丁度 Rous ノ肉腫ヲ考ヘナケレバナラナイ。又英國ノ Barnard, Gye ノ發癌性微生物ヲ思ヒ合セル時ニハ興味ガ湧イテ參リマスガ、然シ是等濾過性病原體(タバコ、モザイク病)ヲ結晶體タラシメルコトガ出來タトイフ報告ヲ手ニスルニ至ツテ驚倒サセラレマシタ。

近時醫界ノ驚クベキ進歩ニツイテハ尙申シ上グベキ事項ガ澤山アリマスガ、ソレハ他日ニ譲リ、私ハ茲ニ世界ニ於ケル醫學研究所ノ現況ニ觸レテ見タイト思ヒマス。

世界ニ於ケル醫學研究所ノ現況

研究所ハ大學ノ教室トハ趣キガ相違シ使命ヲ可ナリ異ニシテ居ルコトハ外國ニ於テモ同様デアリマス。即チ大學ノ教室ハ研究ト共ニ半分ハ初學ノ學生ヲ教育スルトイフ義務ガアルノニ、研究所ハ此教育スルトイフ義務ハナイ代ハリニ未解決ノ難問ニ最大ノ努力ヲ拂フトイフコトニアルノデアリマス。

大研究ニハ大研究機關ガ必要デアルコトハ獨リ醫學ニ限ツタコトデハアリマセヌ。航空技術ノ發達ニハ大航空研究所ガ必要デアル。理化學工業ノ發達ニハ大理化學研究所ガ必要デアルガ如クデアリマス。米國ニ於ケル Rockefeller 研究所ハ Gasser 氏ガ所長デアツテ、同國醫學研究ノ前先端ニ立ツテ居リ、近年特ニ多クノ濾過性病原ニ關スル注目スベキ業績ガアル。佛ノ Pasteur 研究所ハ Martin 氏ガ所長デアリ、「アナトキシシ」、BCG 菌發見ニヨツテ大ニ認メラレタガ、近時ハ餘リ目星シイ研究ガナイ。英國ニ於テハ Dale ガ主裁シテ居ル國民研究所ハ特ニ精華ヲ放ツテ居ル。茲ヨリハヤハリ多クノ濾過性病原及ビ藥理學的研究ガアル。Redingham ガ統制シテ居ル Lister 研究所ハ血清等ノ製造ニ没頭シテ居ルノカ、餘リ大業績が見ラレナイ。獨逸デハ Mühlens 氏ノ所長デアル Hamburg ノ熱帶病研究所、Gildemeister 氏ノ長タル伯林ノ Koch 研究所等ヨリハ餘リ多クノ研究ガナイ。ソレヨリモ大學ノ研究室ヨリ「ヴィタミン」等ニツイテ注目スベキモノガアルガ、ソレデモ近年獨逸ノ業績ハ往年ノ比デナイコトハ何人モ認メテ居ル所デアラウト思ヒマス。Wien ノ研究所、Copenhagen ノ Madsen ノ研究所等カラモ時々注目スベキ業績ガ報告セラレテ居リマス。露國カラハ時ニ可ナリ大膽ナ脫線的ノ様ナ報告ヲ見テ居ルガ、真相ハ此方面ニ於テモヤハリ判然シナイノ

デアリマス。兎ニ角、世界醫學界ニ於テ、各國ノ大研究所ハ可ナリ目醒シイ活躍振リヲ示シテ居ルコトハ注目スベキ事項デアリ、ヤハリ大研究大業績ハ大研究機關ヨリトイフ標語ノ正シイコトヲ思ハネバナリマセヌ。

學者的態度

學者ハ物識 デナケレバナリマセヌガ、單ニ物識デアルダケデハ結局書物ニ劣ルノデアリマス。自分ノ有スル智力ヲ活用シ、以テ獨創ノ研究業績ガアツテ始メテ學者デアルノデ、之レガ書物ニ優ル所以デアリマス。世ニハ屢々非常ニ物識デアリ批判的デアアルガ獨創的業績ノナイ人ガアリマス。此種ノ人ハ學者トシテ缺ケテ居ルノデアリマス。又研究者ニハ屢々他人ノ業績ノ追試ヲ之レ事トシ、同ジ様ナ事ヲ其所デモ此所デモ行ヒ、而カモ動物ノ個性等ヲ全然無視シタ些細ノ相違ニ徒ラニ批判的ニナリ、又之レヲ喜ブモノガアリマス。之レ又歡迎スベキ態度デアリマセヌ。必要アル場合ハ他人ノ業績ノ追試モ覆試モ致サナケレバナラナイコトガアリマスガ、ソレヨリモ、次カラ次ヘト自家獨創ノ研究ニ獻身ノ力ヲ傾倒シ、同ジ様ナ目的ニ進ムニシテモセメテモ其進ム方向ハ別路ヲトル様ニシ、獨創ノ境地ニ没頭シテこそ誠ニ學者的デアルノデアリマス、之レニヨツテ他人ヨリ一步先キニ進ムコトガ出來マス。

本所ニ於テハ夫々一方ニ秀デタ多クノ研究者ガ居ラレマス、從ツテ各部ノ研究者ガ研究作業ヲ爲スニ當ツテハコノ長者ノ言ニ耳ヲ傾ケル態度ハ非常ニ必要デアリマス。徒ラニ頑固デ少シモ長者ノ注意ニ耳ヲ藉サナイ様ナモノモ亦學者トシテハ缺ケテ居ルノデアリマス。由來學者ハ自信ガ強イモノデアリマスガ之レハ頑固トイフコトヲ意味スルノデアリマセヌ、茲ニ到ツテ學者ニハ人格ガ大切デアリマス、努力ガ必要デアリマス。修養ガナクテハナリマセヌ。即チ努力生珠、修養成全ノ格言ハ吾等ニハ金言デアリマス。

私ハ茲ニ吾ガ傳染病研究所ニ記念日ヲ設定シタ意義ヲ明ラカニシ、ソノ第三九周年ノ當日ニ當リマシテ吾等ノ使命ニ關シテ認識ヲ新ラタニシ、世界ニ於ケル醫學研究ノ概況ヲ展望シ、吾等ノ態度ヲ明ラカニシテ、益々本所ノ發展ヲ祈ツテ式辭ト致シマス。最後ニ私ハ最モ悲シキ事ヲ御報告シナケレバナリマセヌ、ソレハ御承知ノ如ク人類愛ノ立場ヨリ隣國支那ニ「カラアザール」研究團ノ幹部ノ一人トシテ出張セラレマシタ山田博士ガ突然病魔ニ侵カサレ、一昨日終ニ不歸ノ客トナツタコトデアリマス、吾ガ研究所ノ非常ナル損失デアリマス。又君ノ如キ専門學科ヲ修メテ居ル士ノ尠イ世界學界ニ於テ、大ナル損失ト申サネバナリマセヌ。私ハ誠ニ二十有餘年ノ僚友ヲ研究ノ爲メニ失ヒマシタ、遺憾ニ堪ヘマセヌ、諸君ト共ニ茲ニ君ノ英靈ヲ弔ヒタイ爲メニ1分間ノ黙誦ヲ御願ヒ致シマス。

山田博士卒去

本所技師理學博士山田信一郎氏ハ先般來カラアザール病研究團幹部ノ一員トシテ渡支濟南ニ於テ研究ニ從事サレテオツタガ、去ル5月20日遽ニ發病肺炎ヲ起サレ藥石效無ク同30日午後3時50分濟南醫院ニ於テ卒去セラレタ。享年55歳デアツタ。

博士ハ新潟縣ノ人、廣島高等師範學校卒業後、東京帝國大學理科學動物學科選科ヲ修了、大正4年ヨリ本所ニ勤務。爾來20餘年ノ長キニ互リ主トシテ衛生昆蟲學ノ研究並ニ實地應用ニ盡力サレ斯界ニ於ケル第一人者デアツタ。資性溫厚、稀ニミル篤學ノ士テ、又忠君愛國ノ念ニ深ク、堅實ナル思想ノ鼓吹者デアツタ。家ダニノ發見命名、蚊ニ關スル研究其ノ他幾多ノ業績ヲ擧ゲ、最近ハ三田村教授等ト共ニ日本流行性腦炎ノ蚊ニヨル傳播ヲ實驗的ニ確證セラレ世界學界ノ注目ノ的トナツタ。先般當所ヲ主體トシテ「カラアザール病診療研究團」ガ組織セラル、ヤ博士ハ其ノ幹部トシテ勇躍參加、大ナル抱負ヲ抱イテ去ル5月5日一行ト共ニ東京ヲ出發渡支、研究ニ從事セラレテ居ツタガ、業未ダ緒ニ就タノミテ急逝セラレタノハ實ニ痛惜ニ堪エナイ。謹ミテ哀悼ノ意ヲ表ス。

告別式ハ去ル6月2日午後3時ヨリ濟南西本願寺ニ於テ執行セラレタガ、當所テハ故博士ノ遺骨ヲ迎ヘテ所内ニ於テ準所葬トシテ葬儀ヲ營ムコトニ決定シタ。

故山田博士葬儀

故山田博士ノ葬儀ハ宮川所長葬儀委員長、三田村教授副委員長、全職員委員トナリ、去ル6月5日午後2時ヨリ當所會議室ニ於テ佛式ヲ以テ營マレタ。

喪主テイ子未亡人以下親族、關係者及ビ本所職員參列シ、僧侶ノ讀經ニ次イテ宮川所長、長與東大總長、廣田外務大臣(代讀)、日本學術振興會第3小委員會委員長稻田博士其ノ他多數ノ弔辭ノ朗讀、弔電ノ披露等ガアツテ後、喪主親族、參列者燒香ヲナシ3時式ヲ終ツタ。

次イテ3時カラ4時迄一般ノ告別式ガ執行サレ多數ノ燒香者ガアリ盛儀デアツタ。尙宮川所長、長與總長、廣田外務大臣及ビ稻田博士ノ弔辭ハ次ノ如クデアル。

山田信一郎君ノ英靈ヲ弔フ

「死ハ易ク、死所ヲ得ルハ難シ」トハ古來ノ金言デアリマス。誠ニ死所ヲ得、山櫻ノ花ノ如クニ散リタイトハ武士道ノ真髓デアリ、大和民族ノ念願ノ極致デアルト思ヒマス。武人ガ戰場デ花ト散リ、藝術家ガ舞臺上デ斃レルガ如キハ誠ニ死所ヲ得タモノト申シテヨイノデアリマシヤウ。私等研究ニ從事スルモノニハ學問ノ爲メニ命ヲ捧ゲルコトハ誠ニ死所ヲ得タモノト申シテヨイト思ヒマス。山田君、君ハ誠ニ此意味ニ於テ死所ヲ得タト申シテヨイ、翕然トシテ世人ノ同情ノ集ツテ居ルノモ全ク其ノ爲メデハ

アリマスマイカ。君以テ瞑スベキデアリマス。然シソレデモ尙吾々ニハ残り惜シイ數々ガアリマス。君ニ借スニ尙拾數年ノ齡ヲ以テシタナラバ。殘サルベキ學績ハモツトモツト偉大ナモノガアツタニ相違アリマセヌ。之レニヨツテ人生ガ享ケルベキ幸福ハ決シテ尠クハナイト確信シマス。假令。死所ヲ得タトハ言ヘ。之レヲ思フト誠ニ物足リナイノデアリマシテ。殘念デ堪リマセヌ。君ノ死ハ吾ガ傳研ノ非常ナル損失ノミデアリマセヌ。學界ニ於ケル誠ニ大ナル損失デアルト信ジマス。今茲ニ君ガ英靈ヲ迎ヘ。永久ノ別ヲ爲サントスルニ當ツテ二十數年來。手ヲ握リ合ツテ暮シテ來タ私ハ心カラ君ヲ弔ヒ。追憶ヲ擅ニシタイノデアリマス。君幸ニ恕シテ呉レ給ヘ。

人ハ棺ヲ蓋フテ後ニ其眞價ガ知ラル、如クニ。君ノ篤學。君ノ誠實。君ノ足跡ガ如何ニモ偉大デアツタコトヲ今更ラ痛切ニ思フモノデアリマス。今ヤ君ヲ知ルト知ラザルトニ論ナク等シク同情ノ念ヲ禁ジマセヌ。多數ノ貴顯紳士淑女ガ茲ニ集ツテ。君ノ英靈ニ心カラナル感謝ヲ捧ゲテ居リマス。吾ガ傳研500ノ同胞ハ。君ガ生前ノ交誼ニ對シテ如何ニシテ感謝スベキヤニ迷ツテ居リマス。等シク熱キ涙ヲ以テ在天ノ英靈ヲ迎ヘテ衷心ヨリ御弔ヒ申サントシテ居ルノデアリマス。君ハ喜んで受ケテ下サルコトト信ジマス。

私ハ先ヅ茲デ君ヲ「護學ノ鬼」ト化セシメタ「カラアザール病ニ就イテ少シク語ツテ。君ガ研究上ノ抱負ノ一端ヲ伺ツテ見タイト思フモノデアリマス。本病ハ一種ノ原蟲ニヨツテ起ル最モ惡性ノ熱性傳染病デアツテ。之レニ罹ルト80—90%ハ其犠牲ニナルト迄言ハレテ居リマス。幸ニ日本内地ニハ見ラレマセヌ。主トシテ熱帶地ニアリ。支那ニ於テハ山東北支ヲ中心トシテ可ナリ蔓延シ。其害モ少々デハナイト承ツテ居リマス。本病ニ關スル醫學的知見ハ病原體ガ明瞭デアリマスコトダケデアリマシテ媒介者ガ砂蠅ノ一種デアルト云ヒ。治療藥トシテ「アンチモン」劑ガ有效デアルト云フコトナドモ報ゼラレテ居リマスガ。ソレガドレ程確實デアルカ判リマセヌ。從ツテ豫防法ナド全然不明デ年々相當多數ノ犠牲ガ拂ハレテ居ルノモ全くコノ爲メデアリマス。此度人類愛ノ立場カラ。研究團ヲ組織シテ支那ニ派遣セラレタノモ全く此理由カラデアリマス。君ハ此企ガ發表セラル、ヤ卒先シテ其幹部ノ一人トシテ之レニ加リ。相當大ナル抱負ト自信トヲ持ツテ彼ノ地ニ赴イタノデアリマシタ。今回ハ北支ニ於テ「レイシユマニア」ヲ媒介スル「バイリン」ノ發生最モ旺ンデアリマス五月ニ青嶋濟南ニ腰ヲ据ヘテ。約2ヶ月間縱横ニ腕ヲ振フ計劃デアリ。一定ノ所見ヲ得テ九月再度渡支スル豫定ト承ツテ居リマシタ。由來研究ノ外何物ヲモナイ君ハ。地理的事情ニ暗イ青嶋ニ於テモ極メテ熱心ニ。大膽ニ恐ラクハ過勞ニ陥ル程ニ迄活動セラレタラウト想像セラレル

ノデアリマス。傳ヘラル、ガ如ク砂蠅ガ果シテ媒介者デアルカ否ヤ。又之レ以外ニ媒介者ガアルカモ知レナイト言フ點モ重要研究項目デアリ恐ラク君ニヨツテ可ナリ判明シタニ相違ナイノト信ジ。大ナル期待ヲ持タレテ居タノデアリマシタガ。今ヤ萬事休シタ次第デ。三嘆スル外アリマセヌ。由來昆蟲學者ハ本邦ニ於テモ決シテ尠クアリマセヌ。然シ昆蟲ト人類ノ疾患トノ關係ヲ研究シテ居ル人ハ本邦ニハ君ヲ措イテ他ニアリマスマイ。世界廣シト雖モ其數ハ2.3ニ止ル位ト思ヒマス。此意味ヨリモ。君ガ永眠ハ誠ニ遺憾至極デアリマス。

君ガ命ヲ奪ツタ病氣ハ果シテ何病デアツタラウカ。千里ノ外ニアル私ニハ確實ノコトハ判リ兼ねマス。報ゼラル、所ニヨルト。上海。南京ニ於テ相當ニ活動シ。青嶋ニ着スルヤ晝夜兼行デ活動セラレ可ナリ過勞ヲ爲シ。疲勞困憊ノ状態ニ於テ青嶋ヨリ濟南ヘノ夜行ニ乗ジ。偶々非常ナル冷氣ニ曝ラサレ。着濟早々。發熱臥床シタト云フコトデアル。君ガ病氣ハ青嶋ニアツタ際既ニ催シテ居タモノデハナカラウカ。斯クシテ咽頭加答兒ハ忽チ肺炎ニ化シ。馳脹ノ高熱ニ見舞ハレルコト十有餘日。餘リ頑強ナラザル君ハ。忽チ心臟衰弱ヲ起シ終ニ不歸ノ客トナツタト言フコトデアル。

「カラザール」研究中ノ肺炎。之レヲシモ内地ニ見ル尋常ノ肺炎トノミ見去ルコトハ慎重デアリタイ氣持チガスル。況ンヤ「アラアザール」病ハ病症ノ初期。然カモ惡性ノ「チフス」様ノ發熱アル場合ハ臨牀診斷ハ非常ニ困難ナルモノトセラレテ居ル。私ノ2.3ノ經驗ニ於テモ此感ハ極メテ深イモノガアリマス。稍々慢性ニ轉ジ。貧血。脾腫ガ現ハレルニ至レバ診斷ハ略々確定的ニ得ルモノデアリマス。又本病ハ屢々肺炎ヲ發シ。下痢ヲ來スモノデアル事等ヲ思ヒ合ハスト。君ハ誠ニ「カラアザール」ニ侵サレ。之レニ流寒等ガ併發誘因シタノデハナカラウカ。剖檢的所見ヲ得ナカツタ今日。千古ノ謎トシテ殘サナケレバナラナイガ。誠ニ君ノ研究ノ仕振リヲ思ヒ。「カラアザール」發症者ノ多イ五月ノ季節ヲ考ヘ合セテ。私ハ此ノ想像ヲ違ウシテ。君ニ一層ノ敬意ヲ表シタイノデアリマス。古來病原不明ノ疾病ノ研究者ガ往々ニ其研究ノ犠牲ニナツタ例ハ決シテ尠クアリマセヌ。即チ發疹「チフス」病原ノ不明ナリシ時代有名ナ研究者リケツト。プロワツェクハ共ニ其犠牲トナリ。其病原體ニ「リケチア。プロワツェキイ」ナル名稱ガ附セラレテ居ルノモ決シテ偶然デハアリマセヌ。南米。南阿ニ今モ尙猩獺ヲ極メテ居リマス黃熱ノ研究團リード。アグラモンドガ犠牲トナリ。吾ガ野口英世博士ガアカラニ於テ犠牲トナツタコトハ餘リニモ有名デアリマス。思フテ茲ニ至ルト君ガ死ハ此點カラモ永ク學問研究史上ニ殘サルベキモノデアルト確ク信ジマス。君ハ誠ニ死所ヲ得タト申シテヨイト存ジマス。

山田君。私等ハ今茲ニ君ノ英靈ヲ迎ヘテ。衷心ヨリ弔ハントスルニ當ツテ。君ガ經歷ヲ聊カ述ブルコトヲ許シテ吳レタマヘ。君ハ明治十六年四月新潟縣中蒲原郡横越村ニ生レ。北蒲原中學ニ入り。後ニ師範學校ニ轉ジ。三十六年廣島高等師範學校ニ入り。四十年同校本科ヲ卒業。約3ケ年間石川縣師範學校ニ教鞭ヲ執ラレタ。四十三年ニ東京帝國大學理學科選科ニ這入ラレ。其修了後大正四年ヨリ吾ガ傳染病研究所ニ來ラレテ爾來二十有餘年間孜々トシテ研究ニ没頭セラレタノデアリマス。本所ニ於テハ先ヅ技手トナリ。大正三年ニハ技師トナリ。十年ニハ衛生昆蟲學研究ノ爲メ歐米ニ出張ヲ命ゼラレ昭和三年ニハ理學博士ノ學位ヲ授與セラレ。數多ノ重要ナル研究業績ヲ發表セラレタノミナラズ其間シヤム國・中華民國等ニモ出張セラレタノデアリマス。今回君ノ病漸ク篤クナルヤ君ノ功績ハ天聽ニ達シ。勅任官ヲ以テ待遇セラレ。從四位ニ叙セラレ。勳四等瑞寶章ヲ授ケラレタ。天恩ノ深キニ感泣セラレテ居ルコト、信ジマス。由來君ハ極メテ熱心ナル研究者デアツタト同時ニ反面。熱烈ナル皇室中心主義者デモアリマシタ。學業ノ餘暇ニハ常ニ諸所ヨリ招カレテ思想問題ニ關スル講演モセラレテ居タ。一度口ヲ開イテ。國ヲ語ルト。必ズヤ忠君愛國ニ觸レズニハ措カナカツタ程。思想的ニハ稀ニ見ル堅固ナル士デアリ又高イ見識ノ所有者デモアリ。吾々ハ常ニ敬意ヲ拂フテ居タノデアリマシタ。君ニハ聊カモ浮薄輕佻ノ氣味ガアリマセナシ。寧ロ鈍重デアリ。一言一句モ忽セニシナイ態度デアリ。未ダ嘗ツテ所謂「シヤレ」ヲ飛バスガ如キコトハ絶對ニナカツタ。寧ロ口ニスルノガ嫌ヒデアルカニサヘ見ヘタ位。行往坐臥謹嚴其物デアツタ。君ガ皇室中心主義ヲ奉ジ愛民族思想ヲ鼓吹シテ居タノモ決シテ偶然デハナカツタト思ヒマス。吾等ハ今ヤ君ノ如キ堅實ノ士ヨリ穩健デハアルガ含蓄深イ思想ヲ再ビ聽クコトガ出來ナクナツタコトハ返ヘス返ヘスモ淋シイ極ミデアリマス。

私ハ茲ニ聊カ君ノ業績ヲ語ツテ見タイ。ソレハ總テテ通ジテ 24 篇アリ。大體四大別スルコトガ出來ルコトハ次表ニ添ヘタ通りデアリマス。本所ニ這入ラレルト先ヅ着手セラレタノハ蚊ニ關スル研究デ。數多ノ新種ヲ發表シテ居ラレル。日本内地ハ勿論。朝鮮。臺灣ニ於ケルソレ迄モ徹底的ニ闡明セラレ。同好研究者ヨリ賞讚ノ的トナリ常ニ内外ノ學者ヨリソノ業績ノ別刷ノ分與ヲ乞ハレタト承ツテ居リマス。蚊ノ研究中。「フィラリア」トノ關係ヲモ研究セラレテ興味アル知見ヲ補遺セラレテ居ルノミナラズ。他面亦蚊ノ撲滅方法ニツイテモ多クノ意見ヲ發表シテ居ラレル。黃熱病原體ノ傳播者デアル「ステゴミア」ニツイテモ極メテ注目スベキ觀察ヲ下シテ居リ總テ 16 篇ニ亙ツテ居リマス。人體疾患ノ媒介者トシテノ蚊ノ研究ハ別トシテ。本邦ニ於ケル蚊屬ニ關スル限り恐ラク君ノ研究ハ完璧ヲ得タモノデハナカラウカト思ハレ。君モ前半生

ハ此研究ニ没頭セラレタト言フテモヨイト存ジマス。

第二群ノ研究業績ハ蝨ニ關スルモノデアアル。近時本邦各地ノ人畜ニ害ヲ流シテ居ル彼ノ家蝨ハ誠ニ君ノ研究ニヨツテ闡明セラレ。君ハ之レニ *Liponyssus nagagoi* ナル名稱ヲ與ヘテ居ラレル。此ノ様ニ君ハ之レガ動物學的一新種デアアルコトヲ明ラカニシタノミナラズ。諸種ノ人體疾患ノ病原體ヲ傳播スルトイフ事實ヲモ發見シタ。特ニ「ペスト菌ハ此蝨ニヨツテ容易ニ傳播セルト云フコトデアアル。第三群ノ研究ハ蚤ニ關スルモノデアアル。特ニ鼠蚤ニツイテ。多クノ知見ヲ發表スルト共ニ一種ノ條蝨(縮小條蝨)ノ中間宿主ガ實ニ此蚤ニアアルコトヲ明ラカニシタ。從來此條蝨ノ中間宿主ハ穀類等ニ見ラル、昆蟲類デアルト言ハレテ居タノニ。君ノ研究ニヨツテ。最モ自然ノ中間宿主ガ明ラカニナツタ譯デ爪實條蝨ノ中間宿主ノ關係ヲ思ヒ合セルト。興味ノ盡キナイモノガアリマス。由來君ハ此様ニ各種ノ昆蟲ノ研究ヲ爲スニ當ツテ。常ニ動物學的研究ニ止ラズ。必ず人類トノ關係ヲ念頭ニ置カレタコトハ。君ガ吾傳研ニ於テ。極メテ重要ナル役割ヲ演ゼラレテ居タ所以デアリマス。私ハ此事實ヲ君ノ次ノ研究ニ於テ一層如實ニ見ルコトガ出來ルト信ジマス。ソレハ濾過性病原。特ニ夏期ニ流行スル腦炎ノ病原體ガ蚊ニヨツテ傳播スルトイフ研究デ三田村博士等ト共同研究ニ於テ實ニ驚嘆スベキ偉大ナル所見ヲ6篇ノ報告ニヨツテ發表セラレテ居リマス。即チ之レハ人モ知ル如クニ本病病原體ハ蚊ニヨツテ傳播セラル、トイフ實驗的所見デアリマス。其業績ハ實驗醫學ノ立場ヨリハ一點ノ非難スベキ所ガアリマセヌ。又此種ノ考ハ米國ノ研究者ニモアツタト云フコトデアリマスガ終ニ實驗的ニ立證スルコトガ出來ナカツタト云フコトデモアリマス。本邦ニ於テモ追試シタ人ガアリマスガ多クハ不成功ニ終ツテ居ルトイフコトデモアリマス。何故デアリマセウカ。ソレハ恐ラク君ノ如キ蚊ノ取り扱ヒニ關スル熟練サノ足りナイ事ニ原因スルノデアリマスマイカ。然ルニ奇態ナ事ニハ是等ノ不成功ノ成績ニ立脚シテ蚊ニヨル病原體ノ傳播ノ事實ヲ否定シ去ラントスル人ガナイデモアリマセヌ。ソレハ實驗醫學ノ生命ヲ奪フモノデアルト申シテヨイデアリマスマイカ。其態度ニハ私ハ贊成スルコトガ出來マセヌ。ソノ様ニ君等ガ實驗的ニ得タ成績ハ萬古不易ノ事實デアリマス。又君達ハ夏期腦炎ノ病原體ノ傳播ハ。唯ダ獨リ蚊ニヨツテ爲サル、トイフノデアリマセヌ。又此事實ガ疫學的ニ見テ何程ノ意義アリヤモ今後ニ殘サレタ問題デアアルコトハ申ス迄モアリマセヌ。然シ蚊ニヨツテ病原體ガ傳播サル、可能性ノアルコトハ決シテ否定スルコトノ出來ナイ事實デアアルコトヲ私ハ君ノ靈ニ向ツテ強ク申シ上ゲタイノデアリマス。

由來君ハ一ツノ研究ニ從事セラル、ヤ。極メテ熱心デアラレタ。何事ヲモ忘レル態

デ研究其事ガ總テ、アラレタ。誠ニ學者ハスクアリタイト常ニ羨シクサヘ思ツテ居タ。蚊ノ研究ニ從事セラル、ヤ「ボーフラ」ヲ抱イテ寢タコトスラアルト聞イテ居ル。臺灣ニ「ボーフラ」採取ニ行ツタ時モ寢食ヲ忘レテ働キ。颱風ノ發生地デアリアノ琉球ノ荒海ノ船中デモ、ワキ目ニハ痛々シイ位「ボーフラ」ノミチ心配シテ船員ヲ驚カシタト云フコトデモアツタ。今度君ガ病漸ク篤クナルヤ。夢寐ノ中ニモ語ルコトハ研究ノ事計リデアツタト云フコトデアリ。令閩ノ來着ヲ千秋ノ思ヒデ待タレタトイフコトデモアツタ。如何ニ平素君ノ研究ニ令閩ガ重要ナル役割ヲ演ゼラレテ居タカガ仄カニ伺ハレテユカシイ極ミデアリマス。私等ハ君ノ様ナ立派ナ同僚ヲ持ツタコトヲ無上ノ誇リトスルノニ。然ルニ今ヤ君ハ逝ヒテ永久ニ再ビ相見エルコトガ出來マセン。吾等同胞ハ今日茲ニ君ノ英靈ヲ神聖ナル研究場裡ニ迎ヘテ。心行ク計リ慰メタイシ。弔ヒタイト願フテ居ル。君モ喜ンデ受ケテ呉レ給ヘ。

昭和12年6月15日

傳染病研究所長 官 川 米 次

山 田 博 士 業 績

- 1) 山田信一郎, 黃熱病ノ傳搬者タル「ステゴミア、フェスシアータ」ノ本邦ニ於ケル分布ニ就キテ (衛生學傳染病學雜誌. 第12卷. 第5號. 大正6年2月. 1917年).
- 2) ,, 日本産蚊科ノ二新種 (動物學雜誌. 第29卷. 第341號. 大正6年3月. 1917年).
- 3) ,, 「ステゴミーア・フェスシアータ」ノ本邦ニ於ケル分布ニ就テノ追加 (衛生學傳染病學雜誌. 第13卷. 第2號. 大正6年7月. 1917年).
- 4) ,, 晩秋近江彦根ニ於ケル「アノフェレス」ノ觀察(一) (動物學雜誌. 第30卷. 第351號. 大正7年1月. 1918年).
- 5) ,, 晩秋近江彦根ニ於ケル「アノフェレス」ノ觀察(二) (動物學雜誌. 第30卷. 第352號. 大正7年2月. 1918年).
- 6) ,, 北海道産「アノフェレス」ノ一新種 (衛生學傳染病學雜誌. 第13卷. 第6號. 大正7年3月. 1918年).
- 7) ,, 蚊族驅除ニ於ケル害敵生物ノ利用ニ就テ(一) (動物學雜誌. 第30卷. 第353號. 大正7年3月. 1918年).
- 8) ,, 蚊族驅除ニ於ケル害敵生物ノ利用ニ就テ(二) (動物學雜誌. 第30卷. 第355號. 大正7年5月. 1918年).
- 9) ,, 蚊族驅除ニ於ケル害敵生物ノ利用ニ就テ(三) (動物學雜誌. 第30卷. 第356號. 大正7年6月. 1918年).
- 10) ,, 渡邊修, 朝鮮産「アノフェレス」ノ一新種 (實驗醫學雜誌. 第2年. 第2號. 大正7年6月. 1918年).
- 11) ,, 蚊族驅除ニ於ケル害敵生物ノ利用ニ就テ(四) (動物學雜誌. 第31卷. 第367

號. 大正8年5月. 1919年).

- 12) Yamada, S., Descriptions of Ten New Species of *Aedes* found in Japan, with Notes on the Relation between Some of these Mosquitoes and the Larva of *Filaria bancrofti* Cobold. (Annotationes Zoologicae Japonenses, Vol. X Article 6, 1921.)
- 13) „ A Revision of the Adult Anopheline Mosquitoes of Japan: Systematic descriptions, their habits and their relations to human diseases, together with an account of three new species. (Scientific Reports from the Government Institute for Infectious Diseases, Vol. III, 1924.)
- 14) „ and Komori, K., From What Point of the Proboscis of the Mosquito do Developed Larvae of *Filaria Bancrofti* escape? (Scientific Reports from the Government Institute for Infectious Diseases, Vol. V. 1926.)
- 15) „ An Experimental Study on Twenty-four Species of Japanese Mosquitoes regarding their Suitability as Intermediate Hosts for *Filaria Bancrofti* Cobbold. (Scientific Reports from the Government Institute for Infectious Diseases, Vol. VI, 1927.)
- 16) „ On a Mosquito-Catching fly. (Kontyu, Vol. II, No. 3, Nov., 1927.)
- 17) „ Observations on a house-infesting mite (*Liponyssus nagayoi*, n. sp.) which attacks human beings, rats, and other domestic mammals, with brief notes of experiments regarding the possibility of the plaque-transmission by means of the mite. (Dobutsugaku Zasshi, Vol. 43, No. 508, 509 and 510, 1931.)
- 18) 山田信一郎, 淺田順一, 宮田壽徳, 縮小條蟲 *Hymenolepis diminuta* (Rudolphi) の發育史 = 關スル研究. 特ニ鼠蚤トノ關係ニ就テ (動物學雜誌. 第48卷. 第8, 9, 10號. 故五島清太郎博士記念號. 昭和11年10月. 1936年).
- 19) „ 濾過性病毒疾患ト昆蟲 (實驗醫學雜誌. 第18卷. 第5號. 昭和9年5月. 1934年).
- 20) „ 流行性腦炎ノ病原ニ關スル研究 (醫事公論. 第1122號. 昭和9年1月. 1934年).
- 21) „ 流行性腦炎ト蚊トノ關係 (東京醫學會雜誌. 第48卷. 第12號. 昭和9年12月. 1934年).
- 22) 三田村篤志郎, 北岡正見, 渡邊漸, 大久保薫, 天神智, 山田信一郎, 森和雄, 淺田順一, 流行性腦炎(夏期腦炎ノ病毒ニツイテ)動物實驗竝ニ蚊ノ感染媒介ニ關スル實驗(日本學術振興會第三小(流行性腦炎)委員會報告要旨) (東京醫事新誌. 第2957, 58號. 昭和10年11月. 1935年).
- 23) 三田村篤志郎, 羽里彦左衛門, 北岡正見, 渡邊漸, 大久保薫, 山田信一郎, 森和雄, 細井輝彦, 日本流行性腦炎ノ蚊ニ依ル媒介ニ關スル實驗 1. 實驗的ニ感染セシメタ蚊ノ體內ニ於ケル日本流行性腦炎病毒ノ消長 2. 實驗的ニ感染セシメタ蚊 (*Culex pipiens* var. *pallens*)ノ二十日鼠ニ對スル媒介性ニツイテ(日本學術振興會第三小(流行性腦炎)委員會第7回會議報告要旨): (東京醫事新誌. 第

3004, 3006 號. 昭和 11 年 10 月. 1936 年).

- 24) 三田村篤志郎, 山田信一郎, 羽里彦左衛門, 森和雄, 細井輝彦, 北岡正見, 渡邊漸, 大久保薰, 天神智, 流行性腦炎ノ感染經路ニツイテ. 蚊ニヨル傳播ニツイテノ其ノ後ノ實驗(東京醫事新誌. 第 3030 號. 昭和 12 年 5 月. 1937 年).

弔 辭

昭和 12 年 5 月 30 日傳染病研究所技師理學博士山田信一郎君. 隣邦中華民國ノ憂疫研究ニ從事中濟南府ニ於テ忽焉トシテ長逝セラル噫悲哉

抑々衛生昆蟲學タル傳染病研究所機構ノ一重要分野ニシテソノ分擔ニ任スル者ハ須ラク昆蟲學ニ通曉スルト共ニ醫學各科ニ涉ツテ深キ關心ト熱意ト常識トヲ兼ネ備フルヲ要ス而シテ傳染病研究所ガ氏ノ樞要ナル地位ニ君ヲ迎ヘタルハ洵ニ適材ヲ適所ニ得タルトイフベシ

君任ニ在ルコト 20 有餘年正確寸毫モ苟モセス孜々トシテ倦マサル研究態度ヲ以テ幾多ノ優秀ナル業績ヲ完成シ新知見ヲ提供スソノ學界ニ寄與セル功績洵ニ大ナリトイフベシ

君資性善良堅實謙讓ニシテ信義ニ敦ク深ク門弟ヲ愛シ篤ク同僚ノ信賴ヲ受ク君ハマタ廣キ常識ヲ有シ忠君愛國ノ念ニ深シ先般「カラアザール」研究班ノ組織セラル、ヤ君ハソノ有力ナル一員トシテ萬難ヲ排シ身ヲ挺シテ決然コレニ參加セラレタリ余ハ從來ノ成績ニ徵シテ君ガ必ズヤ見ルベキ大ナル成果ヲ齎スベシト信ジテ疑ハザリキ而シテ今ヤ職ニ殉ジ幽明境ヲ異ニシ痛嘆極リ莫シ然レドモ研究ヲ生命トシ之ニ斃ルルハ君ガ平素ヨリ本懐トセシ所タルベク同僚後進亦能ク君ガ志ヲ汲ミ遺業ノ大成ヲ期スベシ

在天ノ英靈尙クハ饗ケヨ

昭和 12 年 6 月 15 日

東京帝國大學總長 長 與 又 郎

弔 辭

茲ニ謹テ故從四位勳四等理學博士山田信一郎氏ノ英靈ニ告グ博士夙ニ英俊ノ才ヲ以テ學ヲ廣島高等師範學校及東京帝國大學ニ受ケ大正 4 年傳染病研究所ニ入所以來今日ニ至ル 20 有餘年孜々トシテ其ノ蘊蓄ヲ傾ケ不朽ノ業績ヲ舉ゲシコトハ世ノ已ニ認ムルトコロナリ, 昭和 11 年傳染病研究所ヲ中心トシテ支那ニ於ケル「カラアザール」病研究ノ議起ルヤ博士勇躍シテ其ノ業ニ參加シ本年 5 月 5 日東京出發該病流行地タル支那山東省ニ赴キ着々ト研究ノ歩ヲ進メツ、アリタリ「カラアザール」病ハ早クヨリ支那大

陸ニ流行ヲ極メツ、アルニ拘ラス未ダ其ノ正體明ナラズト聞ク其ノ正體ヲ極メ治療法ヲ探究スルコトハ單ニ醫學ノ發達ニ貢獻スルトコロ多キノミナラズ帝國ノ豫防衛生ノ見地ヨリスルモ極メテ重要ナル事業タリ今ヤ博士ノ蘊蓄ニ依テ此ノ病原蟲ノ正體ヲ益明ニセントシツ、アリシトキ不幸ニシテ中途病ヲ得テ濟南ニ於テ逝去セラル博士ノ逝去ハ正ニ學問ノ爲ニ一身ヲ犠牲ニシタルモノニシテ痛惜之ニ過グルモノナシ然シ乍ラ博士ハ既ニ學界ニ不朽ノ業績ヲ遺シ更ニ博士一身ノ犠牲ハ後進ノ士ヲ奮起セシメ博士ノ後ヲ嗣キ以テ其ノ業ヲ完成セシムルコトヲ信ジテ疑ハズ博士以テ瞑スベキナリ茲ニ聊カ蕪辭ヲ陳ヘテ以テ哀悼ノ意ヲ表ス庶幾クハ英靈彷彿トシテ來リ響ケヨ

昭和12年6月15日

外務大臣 廣 田 弘 毅

弔 辭

理學博士山田信一郎君學術遠征ノ半バ中華民國濟南府ニ於テ溘然トシテ逝カル嗚呼哀シイ哉

君ハ夙ニ衛生昆蟲學ニ志シ未開ノ領域ノ開拓ニ携ハル事多年遂ニ斯界ノ第一人者トナル昭和8年日本學術振興會ニ第三小委員會ノ設置セラル、ヤ君ハ選バレテ直チニ其ノ一員トナリ爾來日夜研鑽倦ム處ナク流行性腦炎ノ研究ニ從事セラル我が第三小委員會ガ君ノ如キ研究者ヲ擁シソノ能力ヲ擴大強化シ得タルハ吾人ノ意ヲ強クセル處トス

君ハ資性端正且ツ誠實ソノ研學ノ態度タルヤ眞摯且ツ公平ニシテ終始一貫委員タルノ責務ヲ果タシソノ成果ニ見ルベキモノ大ナリシハ中外ノ汎ク認ムル處ナリ

吾人ノ君ニ恃ツ處尙大ナルモノアリシニ今君ノ急逝ニ遭フ獨リ君トソノ一家ノ不幸タルニ止マラス我が委員會ノ損失何物ニモ換ヘ難シ痛恨何ゾ堪ヘン

茲ニ委員會ヲ代表シ謹ミテ哀悼ノ忱ヲ致ス

昭和12年6月15日

日本學術振興會第三小委員會

委員長 稻 田 龍 吉

學術集談會

去ル5月27日(木)午後1時ヨリ講堂ニ於テ學術集談會ガ舉行サレタガ、演題ハ次ノ如クデアツタ。

演題

1. 家鼠體內ヨリ分離セル好氣性細菌群ニ就テ (第1報) 特ニ「グラム陰性桿菌ノ生物學的分類ノ研究」
 { 入田 貞義君
 神宮寺惣次郎君
2. 放線狀菌ノ均等培養(Homogene Kultur) ト變異性及ビ其ノ血清學的1新現象ニ就テ (第1報)
 { 長谷川 秀治君
 東風 睦之君
3. 疫學ニ關スル實驗的研究(綜説)
 田宮 猛雄君

記念日式舉行

當所テハ今般記念日ヲ設定スルコトナリ、6月1日ヲ記念日トナスコトニ決定シ、今年ヨリ實施スルコトナツタガ、去ル6月1日午前11時ヨリ、長與帝大總長他多數ノ當所關係者ヲ招待シテ、講堂ニ於テ第1回記念日式ヲ舉行シタ。先ヅ君ケ代ニ唱ノ後、所長ガ別項所載ノ如キ式辭ヲ述ベラレテ式ヲ閉シ、續イテ食堂ニ於テ簡單ナル立食ノ宴ガ催サレ、先般所内ヨリ募集當選シタ所歌(服部正作曲、高津敬太郎作詞)ヲ合唱シ、席上長與總長祝辭ヲ述ベラレ、二木博士ノ發聲テ萬歳ヲ三唱シテ散會シタ。

次イテ午後1時カラ講堂ニ於テ講談、映畫、漫談等ノ餘興ガアリ、4時頃和氣霽々裡ニ終了シタ。

春秋會遠足會

春秋會テハ去ル5月16日(日)房總廻リ遠足會ヲ催シタ。參加人員宮川所長以下約150名、午前7時24分兩國驛發新綠特別列車ニテ内房ヲ經テ小湊驛ニ到リ下車、小湊ホテルニテ晝食後、誕生寺參詣、妙ノ浦ヲ見物シタ後、

「バス」ニ分乘シテ清澄山ニ登リ清澄寺ヲ參詣、再ビ「バス」ニテ下山、天津驛ニ到リ、午後4時41分同驛發、8時13分兩國驛ニ歸着散會シタ。

當日ハ朝ハ曇天デアツタガ、天氣豫報通り晴天トナリ、終日愉快ニ過スコトガ出來タ。

學友會へ寄附

金7圓59錢也

安藤啓三郎君

人事異動報告

昭和12年6月3日傳染病研究所

發令月日 辭令 官職 氏名

- | | | | |
|------|----------------|----------|----|
| 4.28 | 依願傳染病研究所業務囑託ヲ | | |
| | 解ク | 伊藤 正雄 | |
| 4.30 | 任傳染病研究所 技手 | | |
| | 第6研究部 | 神子 謙 | |
| 〃 | 傳染病研究所囑託ヲ解ク | | 同人 |
| 〃 | 傳染病研究所業務ヲ囑託ス | | |
| | 第7研究部 | 荒川 清二 | |
| 〃 | 同 第2研究部 | 小川 政敏 | |
| 〃 | 同 第1研究部 | 高瀬 仁 | |
| 〃 | 同 第6研究部 | 尾澤朝一郎 | |
| 〃 | 同 第4研究部 | 池田 康德 | |
| 〃 | 傳染病研究所雇ヲ命ス | | |
| | 第7研究部 | 中神 清一 | |
| 〃 | 依願傳染病研究所業務囑託 | | |
| | ヲ解ク 第7研究部 | 同人 | |
| 〃 | 傳染病研究所業務ヲ囑託ス | | |
| | 第8研究部 | 田中 繼雄 | |
| 〃 | 研究生退學ヲ命ス | 田中 繼雄 | |
| 〃 | 中華民國へ出張ヲ命ス(カラ | | |
| | アザール病調査ノ爲) 5月5 | | |
| | 日出發 | 教授 佐藤 秀三 | |
| 〃 | 同 同 | 囑託 井田 清 | |
| 〃 | 同 同 | 同 細井 輝彦 | |
| 〃 | 滿洲國及中華民國へ出張ヲ | | |
| | 命ス 同 | 技師 山田信一郎 | |
| 〃 | 同 同 | 技手 森下 哲夫 | |

4.30	研究生退學		中島 五六	5.12	依願傳染病研究所業務囑託	
„	同		加藤 信一		ヲ解ク	尾澤朝一郎
5.1	陸叙高等官三等	東大教授	細谷 省吾	5.22	傳染病研究所業務ヲ囑託ス	
„	叙從五位	同	同 人		附屬醫院	津本 淳三
5.7	研究生入學 第8研究部		遠藤 敏雄	5.30	卒去	技 師 山田信一郎

實驗醫學雜誌

(第二十一卷 第三號)

正 誤 表

			誤	正
表紙	目次	10行目	S. <u>b</u> ereilly	S. <u>b</u> areilly
480頁	左側	3行目	S. <u>b</u> ereilly	S. <u>b</u> areilly
504頁	右側	9行目		同 高木逸磨
同	同	16行目	工藤正三郎	工藤正四郎

雜 報

傳染病研究所ノ現況

宮 川 米 次

本稿ハ昭和12年7月6日畏クモ 閑院宮春仁王殿下竝ニ同妃殿下ガ吾ガ研究所ヲ御視察遊バサレタ際ニ本所ノ施設一般竝ニ現況ヲ御説明申シ上ゲマシタ際ノ要旨ノ大要デアリマス。謹ンデ記シテ記念ト致シタイノデアリマス。

傳染病研究所ノ創立竝ニ其沿革

明治25年ニ北里柴三郎氏等ニヨツテ私立傳染病研究所ガ芝公園内ニ設立セラレ。傳染病一般ニ關スル研究ヲ專心致シテ居ツタノデアリマスガ、之レガ明治32年ニナツテ官立トナリ。明治38年ニハ研究作業ノ外ニ血清、痘苗製造作業モ兼ネ行フコトニナリマシタノデ、擴張スルノ必要ニ迫ラレテ、明治39年現在地ニ移轉致シタノデアリマス。大正3年10月迄ハ本所ハ内務省ノ所管ニ屬シ。研究竝ニ製造作業ヲ爲シ行政官ノ直接監督ヲ受ケテ居タノデアリマシタガ、其主要ナル使命ハ醫學ノ研究ニアルトイフ立場ヨリ此年ニ文部省ニ移管セラレ。大正5年ニハ東京帝國大學ニ附置セラレ專心醫學ノ研究ヲ爲シ、其蘊奧ヲ極メヨト命ゼラル、ニ至ツタノデアリマスガ、然シ尙本所ハ日本ノ衛生行政業務ニ關シテハ内務大臣ノ監督ヲ受ケ其諮詢機關トモナツテ居ル次第デアリマス。本年ハ創立後丁度39周年ニ當ルノデアリマス。其間所長ノ職ニ就キマシタノハ初代ガ北里柴三郎氏デ約15ケ年間、次イデ青山胤通氏デ2ケ年、第三代ハ林春雄氏デ3ケ年、第四代ハ長與又郎氏デ15ケ年間、第五代ハ私デ約4ケ年ニ及ビ今日ニ至ツテ居ルノデアリマス。

本所ノ職員數

本所ノ主要ナル幹部ハ所員、技師ト事務官トヨリナツテ居リマス。所員ハ總テ東京帝國大學教授又ハ助教授デアリマシテ、通ジテ12名デアリマス。技師4名、事務官1名、合計17名ガ主腦部トナツテ居ルノデアリマス。其下ニ技手49書記其他ノ判任官13、囑託65、研究生50合計凡ソ200名ガ、本所ノ精神的業務ノ主體ヲナシテ居リ。夫等ノ人々ガ雇員、傭人約300名ヲ使用シテ、合計500名ガ本所ノ使命達成ニ懸命ノ努力ヲ致シテ居ル次第デアリマス。

本所ノ面積竝ニ建築ノ建坪。

本所ハ其昔徳川時代ニハ大久保家ノ下屋敷ノ所在地デアリ、彦左衛門ノ生湯ノ井戸ガ今モ尙梅林ノ内ニアリマシテ、將來記念物トシテ保存シタイト思ツテ居ルノデアリマス、尙東端ニハ由緒アル五島稻荷ガ勸請セラレテモ居リマス。地形ハ大體、瓢形デアリマシテ、總テ通ジテ 22000 坪(約 18. エーカア)アリマス、前部ノ膨ミハ約 3500 坪アリマシテ、之レヲ公衆衛生院ニ貸與シマシテ將來本所ト姉妹關係ヲ結ブコトニナツテ居リマス、後部ノ膨ミニハ即チ本所ノ建築物ガアリマシテ、本館ノ總坪約 5400 坪餘其他ニ厩舎約 1000 坪餘デ合計 6400 坪トナリマス、大正 12 年ノ關東大震災ノ厄ニハ本所モ勿論免レルコトハ出來マセナンダ、幸ニ火災ハ起シマセナンダガ、建物ノ總テハ使用ニ堪ヘラレナクナリマシタノデ、百方努力シマシテ、最近ニ至リマシテ、漸ク研究室及ビ病室ノ完成ト、厩舎ノ一部ガ出來上リマシタガ、尙厩舎ノ大半ト小動物舎トガ殘サレテ居リマス、之レモ次第ニ再築サレルコトニナツテ居リマス、本所ノ使命ハ日ニ月ニ擴大セラレマシテ研究部ハ現在既ニ非常ニ狹溢ヲ告ゲテ居リマスノデ、近キ將來ニハ第二本館ノ増築ノ必要ニ迫ラレテ居ル次第デアリマス。

本所ノ職務ノ主要ナルモノ。

本所ノ職務ノ主要ナルモノハ、原因不明ノ疾病ノ徹底的研究、其治療豫防ヲ爲ストイフコトニアリマス、今日醫學ハ非常ニ進歩致シテ居ル様デアリマスガ、原因ガ確實ニ明ラカデアリ、之レニ向ツテ完全ナル治療及ビ豫防ヲ致シ得ル種類ハ餘リ澤山ハアリマセヌ、假令原因ハ明瞭デアツテモ、治療及ビ豫防ガ完全デナイモノモ少クアリマセヌ、即チ多クノ傳染病例ヘバ「チフス」、赤痢、「コレラ」等々ノ如キガ之ニ屬シマス、此様ナ醫學ノ現状デアリマスカラ本所ノ使命ハ廣ク醫學ノ蘊奧ヲ極メヨトイフコトニナルデアリマス、言ヒ代ヘルト醫學ノ研究ガ本所ノ主要ナル使命デアルノデアリマス、疾病ノ治療及ビ豫防トイフ立場カラ、本所カラハ諸種ノ傳染病ノ治療ニ使用セラレマス治療血清ガ作ラレテ居リマス、例ヘバ「デフテリア」破傷風治療血清等々ガソレデアリマシテ、總テ約二十種類程アリマス、又諸種ノ傳染病ノ診斷ニ使用セラレマス診斷用血清モ作ラレテオリマス、又豫防用ノ「ワクチン」、「アナトキシン」、痘苗等モ作ラレテ總テ三十有餘種アリマシテ、通ジテ五十有餘ノ製品ハ本邦内地ハ勿論、滿洲、支那、南洋諸國ニモ送ラレ、可ナリ廣ク使用セラレテ居ル次第デアリマス、今後益々研鑽ヲ重ネマシテ、ヨリヨキモノヲ澤山世上ニ送り出シ、疾病ノ治療豫防ニ資シタイト念願シテ居ルモノデアリマス。

此外尙本所ハ諸種ノ検査物ノ検査ニモ應ジテ居リマスシ、又我々ノ得タ智識ヲ一般

ニ知ラシメタイ爲メニ邦歐文ニヨツテ編輯セラレテ居リマス學術雜誌ノ發行ノ外ニ、年ニ2回3ヶ月宛醫學講習モ行フテ居リマス、其ノ一ハ一般傳染病豫防醫學ニ關スルモノデアリマスシ、其ノ二ハ公衆衛生學ニ關スルモノデアリマス、最モ此後者ハ明年ヨリハ公衆衛生院ノ完成ヲ俟チマシテ、此方デ行ハレル事ニナツテ居リマス。此機會ニ公衆衛生院ニ就イテ一言申シ上ゲテ見タイノデアリマス、關東大震災ノ直後大正12年(1923年)米國ロツクフェラー財團ヨリ本邦ニ公衆衛生技術官養成所ヲ作ツテハ如何カ、其財源ハ寄附スルガトイフ申込ミガアリマシタ、時ノ内務大臣ハ後藤新平伯衛生局長ハ山田準次氏デアリマシタガ本邦當局ニ於テハ其議ガ熟セズ1925年以來此話ハ自然ニ完全ニ立消ヘノ形トナリ、ロ財團ニ於テモソレヲ打チ切ツタノデアリマシタ、然ルニ昭和5年(1930年)安達謙藏氏ガ内務大臣トナリ、赤木朝次氏ガ衛生局長ニナリマシタ時代ニ種々斡旋スル人ガアリマシテ此話ガ再燃シテ來タノデアリマシテ、多少ノ迂餘曲折ハアリマシタガ、本邦政府ハロ財團ノ申出ニカ、ル公衆衛生技術官養成所設置ノ件ヲ承認シ、ロ財團ヨリハ約200萬弗ヲ寄附スルコトニナリマシテ本館ヲ本所内ニ建設シ、京橋區ト埼玉縣トニ市街地ト農村トノ實習地區ヲ設ケ此處ニ夫々保健館ヲ作ルコトニナリ着々進行シテ居ルノデアリマス、本所内ニ於ケル本館ハ明春匆々落成ノ域ニ達シマスレバ茲ニ於テ本邦ニ於ケルアラユル方面ノ公衆衛生ノ實地ニ當ル技術官ヲ養成スルノデアリマス、吾傳研ニ置キマシテハ醫學ノ研究ヲ主要業務トナシ、之レニヨツテ得タ成績ヲ實地ニ應用スル人ヲ公衆衛生院デ養成シ、以テ本邦ノ公衆衛生ノ向上ヲ計ルコトニナツタノデアリマス、近時國民ノ體位ガ次第ニ低下ノ一路ヲ辿ツテ居リマシテ、寒心ニ耐ヘナイ次第デアリマス時ニアタリマシテ、此種ノ企テノ完成ヲ見ルコトハ、日本國民ノ保健衛生ノ爲メニハ慶賀ニ耐ナイ事ト存ジマス、私等ハ切ニ其圓滿ナル發達ヲ祈ツテ止マナイ譯デアリマスト同時ニ、本所トハ完全ニ打ツテ一丸トナツテ、吾國ノ爲メニ盡シタイト存ジテ居ルノデアリマス、聊カ傳研以外ノ事ニ觸レテ恐縮ニ存ジマスガ、本所ト主要關係ヲ有スル機關デアリマスカラ一言觸レサセテ頂イタノデアリマス。

本所ノ構成

本所ハ8個ノ研究部、4個ノ特別研究室及ビ百有餘名ヲ收容スル附屬醫院トヨリナツテ居リマス、ソシテ、ソノ致シマスル主要ナル業務ハ細菌學、血清學、病理學、化學、血清、痘苗ノ製造、及ビ一般內科的疾患ノ治療等ノ仕事デアリマス、之レト同時ニ内務省ニ對シマシテハ衛生行政ノ諮詢機關トシテ種々ノ行政的事項ニツイテモ相談ニ預ツテ居ルノデアリマス、一、二ノ例ヲ申シマスナレバ、近時屢々夏期ニ流行シマ

ス腦炎ノ如キハ、本所トシテハソノ原因ノ探究ト共ニ治療、豫防ニツイテモ、全力ヲ注ガナケレバナラナイ義務ガアリマス又實際、多數ノ研究者ト多クノ費用トヲ此方面ニ向ケテ使用シマシテ、可ナリ注目スベキ業績ヲ舉ゲテ居ルノデアリマス、昨年濱松市ニ大福餅ニヨル中毒ノ起ツタ場合ニ於テモ本所ハ其原因ニツイテ可ナリ研究ヲ爲シ、其後ニ此種ノ傳染病ノ再發ヲ防止スル爲メノ諸種ノ行政的施設ニツイテモ小島三郎氏ヲ主任トシテ種々研究シタ結果ヲ内務省ニ進言シテ居ル次第デアリマス、又一昨年神奈川縣川崎市ニ赤痢ノ爆發的流行ガアリマシタ當時ニオキマシテモ本所ハ全力ヲ舉ゲテ、保菌者ノ檢索ヲ爲シ、實ニ數萬人ノ多クニ及ンデ、爆發的流行ノ防止ニ資シタコトハ甚大ナルモノガアツタト信ズルノデアリス、斯ノ如キモ亦醫學ノ研究以外疾病ノ豫防ニ對シテ重大ナル一個ノ使命ノアリマスコトヲ示ス次第デアリマス。

最近ニ爲サレタル二、三ノ注目スベキ研究、

最近本所ニ於テハ、二、三ノ可ナリ注目スベキ世界的業績ガ發表セラレテ居リマス、今ソノ名ダケデモ申シ上ゲマスナラバ、二木謙三、石原喜久太郎氏等ニヨツテ鼠咬ニヨツテ起ル疾病ノ病原體デアル一種ノ「スピロヘータ」ヲ發見シマシタ、長與又郎氏等ニヨツテ、多年醫界ノ謎トセラレテ居リマシタ恙蟲病ノ病原體ガ「リケチア」ノ一種デルコトヲ確定シ、此「リケチア」ヲ媒介スル恙蟲ナル一種ノ蟲ノ發育環ヲ完全ニ追究決定シマシタ、又宮川米次等ハ最近世界的ニ認めラレタ、一新性病デアル、所謂第四性病ノ病原體ヲ發見シマシテ、本邦學者ハ勿論、歐西ノ學者ヨリモ次第ニ承認ヲ得ツ、アル次第デアリマス、種痘ニ使用致シマス痘苗ハ從來牛ノ皮膚組織ガ混入シテ居ル爲メニ皮下ニ注射スルコトガ出來ナカツタノデアリマスガ、矢追秀武氏ハ此痘苗中ヨリ病原體ヲ純粹ニ採取スルコトニ成功シ從來世界ノ學者ガ企テ、出來ナカツタ皮下注射法ヲ發表シマシテ、多クノ人々ニ實施シタ成績ニヨツテ注目スベキ良好ナモノデアリマシテ、之レニヨツテ痘痕ヲ殘サズニ種痘ヲ完了スルコトニ成功シマシタノデアリマス事ハ誠ニ快心的發見ト申シテヨイト思ヒマス、「ヂフテリア」ノ豫防注射、破傷風ノ豫防注射等ハ可ナリ確實ナル效果ノアルモノデアリマスガ、何分反應ガ強クテ、一般的使用ガ出來ナカツタノデアリマスガ、細菌學ノ進歩ニヨツテ、之レヲ「アナトキシン」化スルコトガ出來、可ナリ反應ヲ減弱サセルトコトガ出來タノデアリマスガ細谷省吾氏ノ研究ニヨツテ注射材料ヲ精製シマシテ、純粹ナル毒素ヲ、無毒化シテ豫防注射ヲ爲スコトガ出來ルヤウニナリマシテカラ此方面ニ格段ノ進境ヲ見、世界ノ豫防醫學界ガ、純粹毒素ヲ豫防ニ使用スル様ニナツテ來テ居ル有様デアリマシテ、正ニ細谷氏ノ研究ガ此方面ノ嚆矢ト申シテヨイト存シマス、其外夏期腦炎ニ關シ

マシテハ三田村篤志郎氏等ノ一團ノ研究員ガ必死ノ努力ニヨリマシテ、病原體ノ性狀ガ可ナリ明瞭ニナリ、且ツ蚊ニヨツテ媒介セラル、コトヲ明ラカニシ加フルニ本邦ノ馬ニ屢々見ル腦炎ガ同一病原體ニヨルノデアルコトガ城井尙義氏ノ研究ニヨツテ明ラカニナリマシタ。此種ノ研究ハ今後ノ續行ニヨツテ著シク進歩スベキモノト信ジマス。高木逸磨氏等ハ多クノ人々ガ企テ、ドウシテモ出來ナカッタ癩ノ病原菌ヲ動物ニ感染サセルコトニ成功シ、加フルニ癩菌ノ純粹培養モ出來マシタコトハ、非常ナル學動ト申シテヨイト存ジマス。アノ忌ムベキ癩病ハ Hansen 等ノ發見シタ癩菌ガ原因デアラウト言ハレテ居タガ動物ニ感染サセルコトガ出來ナカッタ。又此菌ヲ純粹培養スルコトガ出來ナカッタノデ、眞ニ病原菌ナリトイフコトハ可ナリ異論ガアツタノデアリマシタガ、今高木氏ノ研究ニヨツテ此疑點ガ解決セラレルニ至ツタ様ニ思ハレルノデアリマス。又同氏ハ兎ニ於テ遺傳微毒ニ關シ廣汎ナル研究ヲ行ハレテ居リマス、本邦人ノ約10%ハ本病ニ罹ツテ居リマス此罹患者ヨリ生レル子孫ニ對シマシテ遺傳微毒ナルモノハ極メテ重大ナル事項ニ屬スルコトハ申ス迄モアリマセヌ。佐藤秀三氏ハ結核部ノ主任トシテ、諸種ノ藥劑ヲ用ヒテ化學療法ヲ試ミ一、二、注目スベキ所見ヲ得テ居リマスガ、尙同氏ハ今春ヨリ一團ノ研究員ヲ率ヒテ、支那、特ニ北支ノ疫病タル「カラアザール」病ノ研究ニ赴キ、今モ研究員ノ一部ガ彼地ニ殘ツテ頻リニ檢索ニ從事シテ居リマス、誠ニ人類愛ノ立場ヨリ愉快ナル企ト申シテヨイト思ヒマスト同時ニ相當ノ成績ヲ擧ゲ得ルコト、信ジテ居リマス。其他ノ所員モ夫々相當重要ナル項目ニツイテ熱心ニ研究ニ奮進シテ居ルノデアリマス。

本所ノ研究ニ使用セラル、經費竝ニ試験動物數

本所一ケ年間ノ經費ハ約70萬圓、内政府支出金7萬圓デ他ハ自給自足ヲ爲シテ居ルノデアリマス、各般ノ血清痘苗製造ニ要スル動物竝ニ研究ニ使用スル實驗動物ハ非常ナル數ニ上リマス、

	1ケ年間ノ使用數	現在數
馬	200	170
牛	30	16
山羊、綿羊	50	38
犏牛	400	
猿	100	39
狐	20	12
犬	200	108

兎	5,000	700
モルモット	12,000	2,100
白鼠	2,200	500
マウス	35,000	10,000

此外ニ尙鳩、鶏等ノ鳥類モ相當ニ澤山ニ用ヒマシテ、極メテ、驚クベキ數ニ上ルノデアリマス。

本所ハ世界五大研究所ノ一ツト申サレテ居リマス、即チ紐育ノロツクフェラー研究所、倫敦ノ國民研究所、巴里ノパスツール研究所、ハンブルグ熱帯病研究所ガソレデアリマスガ、私ハソノ何レニ比シテモ内容外觀決シテ遜色アリトハ思フテ居リマセヌガ、日進月歩ノ科學界デアリマスカラ常時獻身ノ努力ヲ持チマシテ願クバ醫學界ノ先端ニ立チ吾國運ノ進歩ト竝ビ行キタイト願フテ居ル次第デアリマス。 以上

閑院宮春仁王、同妃殿下 當所御視察

閑院宮春仁王、同妃殿下ニハ去ル7月6日(火)午後1時ヨリ約3時間ニ互リ當所ヲ御視察遊バサレタ。

學術集談會

去ル6月24日(木)午後1時カラ講堂ニ於テ學術集談會ガ開催サレ、演題ハ次ノ如クデアツタ。

演題

1. 結核症ニヨル海狸ノ各種臟器竝ニ血液中ノ還元グルタチオン及ビ還元型アスコルビン酸含有量ノ變動ニ就テ
2. 家鷄發生ニ關スル血清學的研 究(第1報)(特ニ家鷄及鷄胎兒ニ就テ) 高野正男君
3. 「ヂフテリア豫防液(精製アナトキシン)」ノ效力檢定ニ就テ

{柳澤謙君
續木正大君

{進藤宙二君
川島四郎君
利部光四郎君
田中正一君

4. 「ヂメドン」ニヨル「ホルムアルデヒド」ノ微量定量法ニ就テ「ヂフテリア豫防液内ホルムアルデヒド」ノ定量

{内野豊生君
保坂一郎君

5. 鼠蹊淋巴肉芽腫ノ病原體ニ關スル研究補遺(其二)罹患マウスノ腦脊髄液ニ就テ

{岡西順二郎君
エリック、グイネ君

6. 鼠蹊淋巴肉芽腫病毒ヲ「マウス腦」ニ接種罹患セシメタル際ノ組織學的變化及其發生機轉

石光 蒸君

7. 實驗的狂犬病ノ血清處置ニ關スル研究(第1報)

{矢追秀武君
金澤謙一君

8. 傳染病患者發生數ノ標準及流行波ノ豫知(綜説)

野邊地 慶三君

佐藤教授歸朝

「カラアザール病研究團長トシテ 中華民國

へ出張研究中デアツタ 本所所員佐藤教授ハ去ル6月25日(金)午前8時東京驛着歸朝セラレタ。

尙同教授ハ來ル8月又同地へ出張ノ豫定デアルト。

第82回講習會終了式

去ル7月10日(土)午前10時半ヨリ講堂ニ於テ第82回講習會カ舉行サレ、所長ヨリ一場ノ訓示ガアツタ。

中神清一君出征

本所第7研究部勤務ノ中神清一君ハ 動員招集ヲ受ケ去ル7月16日(金)午後0時27分品川驛出發濱松飛行聯隊へ入隊、出征ノ途ニ就クコト、ナツタ。

學友會へ寄附

金5圓43錢也

{柳澤謙君
安藤啓三郎君

金17圓60錢也

入田貞義君

金9圓38錢也

戸田又生君

金6圓40錢也

北條圓了君

金12圓65錢也

{中村敬三君
高橋義夫君

人事異動報告

發令月日	辭令	官職	氏名
6.1	愛知縣下へ出張ヲ命ス(名古屋市へ)	技師	城井 尙義
..	樺太へ出張ヲ命ス	技手	大久保 薰
6.3	敘勳二等授瑞寶章	技師	城井 尙義
..5	中華民國へ出張ヲ命ス	囑託	森 和雄
..8	研究生入學許可 (第二研究部)		森岡 成一
..9	岡山縣下へ出張ヲ命ス(岡山市へ)	教授	三田村篤志郎
..	同	技手	北岡 正見
..	同	囑託	森 和雄
6.29	研究生退學許可		高須勘次郎
..	愛知縣下へ出張ヲ命ス(名古屋市へ)	教授	高木 逸磨

強イトイフ)。

1) 組成ノ差違

	Northrop ノ「ペプシン」結晶	Brücke ノ無蛋白「ペプシン」
窒素含有量	15.5%	8.2%
Tyrosin 含有量(Millon ノ反應ニヨル)	15.6%	殆ンド又ハ全クナシ
Tryptophan 含量(Voisinet-Fürth ノ反應ニヨル)	Ca. 3%	殆ンド又ハ全クナシ
Biuret 反應, Sulfosaley 酸, 「フェロシアン」水素酸, 醋酸鉛等ニヨル蛋白反應	陽 性	陰 性

2) 酵素作用ノ差違。

a) 乾酪素ヲ基質トシテ酵素作用ノ過程ヲ比較スルト, Brücke ノ「ペプシン」ハ Northrop ノ「ペプシン」ニ比シ時間ノ經過ト共ニ作用ガ減弱シヤスイ。又 Northrop ノ「ペプシン」ハ酵素量ヲ増スト作用モ著シクフェルガ Brücke ノニハ然ルコトガナイ。

b) Brücke ノ「ペプシン」ハ少量トキハ初期分解速度(一時間目ニ於ケル)ガ Northrop ノヨリ著シク速イ。各々 0.012—0.024mg「ペプシン」窒素量ヲモツ場合ハ作用等シク, ソレ以上ノ量テハ Northrop ノ方が速イ。

c) 兩方ヲ半量宛混合セルモノ、作用ハ、一方ダケテ分解セシメルヨリ 24 時間目ニハ

作用大デアアル。一方ノ酵素テ 24 時間分解セシメテ後他方ノ酵素ヲ加ヘテ分解ノ進行如何ヲミルノニ, Northrop ノテ分解シテオイト後 Brücke ノ「ペプシン」ヲ加ヘタ方が基質ノ分解ハス、ム。

著者等ハ更ニコノニツノ「ペプシン」ガ共ニ至適水素「イオン」濃度ヲ pH 2 ニ持チ, 胃ニ存スル他ノ酵素トハ共ニ異ナルコトヲ調べ, コノニツハ非常ニ相似シテキルガ尙特異性ニ於テ區別シ得ル酵素デアラウトイツテキル。ソシテコノニツハ同ジ „Agon“ (作用圍) ヲ有シ, 異レル „Pheron“ (運搬體) ヲ有スルモノデアラウカト推論シテキル。 (中村)

雜 報

其後ノ本所關係出征者

今回ノ北支事變ニ際シテ, 其後 8 月 10 日迄ノ本所關係出征者ハ次ノ如クデアアル。

- 松 本 信氏(「ツクチン」室勤務)
- 西 下 止 夫氏(醫局技手)
- 中 山 富 雄氏(陸軍委託研究生)
- 出 井 勝 重氏()
- 市 川 收氏()

人事異動報告 (昭和 12. 8. 2)

- | 發令月日 | 辭 令 | 官職 | 氏 名 |
|------|----------|-----------|----------|
| 6.30 | 依願免本官 | 技手 | 山田 秀一 |
| 7.10 | 神奈川縣下へ出張 | | |
| | | ヲ命ス(横濱市へ) | 教授 田宮 猛雄 |
| „ 12 | 研究生入學許可 | | |
| | (第二研究部) | | 新井三九雄 |
| „ 14 | 同(第四研究部) | | 濱野 基齊 |
| „ | 神奈川縣縣下へ出 | | |

	張ヲ命ス(横濱市へ)		” 同	” 鐵本 總吾
		教授 田宮 猛雄	”21 朝鮮へ出張ヲ命ス	
”	同	技手 安藤啓三郎	(仁川出張所)	技手 佐藤 久藏
”	依頼解囑	囑託 手塚 悦郎	”23 佐賀縣下へ出張ヲ	
”16	廣島縣下へ出張ヲ		命ス	技師 城井 尙義
	命ス(廣島市へ)	技師 遠山 祐三	” 同	技手 大久保 薰
”	同	囑託 安川 隆		

雜 報

其後ノ本所關係應召者

今回ノ日支事變ニ際シテ、其後8月11日以後9月13日迄ノ本所關係應召者ハ次ノ如クデアル。

中村敬司氏(醫局勤務, 7月19日應召)

鈴木良次氏(第一研究部)

江崎唯人氏(醫局)

大原良之氏(採血室)

金澤謙一氏(第七研究部)

進藤宙二氏(第二研究部, 海軍軍醫大尉)

篠田茂氏(疫學室)

田部邦之助氏(陸軍派遣研究生)

神子謙氏(第六研究部)

飛田義雄氏(事務室)

中野豊策氏(第一研究部)

學友會へ寄附

金7圓97錢也 戸田又生君

金7圓35錢也 戸田又生君

金12圓65錢也

金12圓75錢也

金6圓92錢也

金10圓54錢也

金17圓21錢也

金15圓24錢也

金16圓65錢也

金36圓24錢也

金35圓31錢也

渡邊一郎君

細谷省吾君

細谷省吾君

森下哲夫君

森下哲夫君

森下哲夫君

小田通男君

草野與平君

宇賀武俊君

人事異動報告 昭12.9.3調

發令 月日	辭	令	官職	氏名
----------	---	---	----	----

- | | | | | |
|-------|--------------|--------------|-------|--------|
| 7. 22 | | 佐賀縣下へ出張ヲ命ス | 教授 | 三田村篤志郎 |
| .. 29 | 依願免本官 | 技手 | 中川錦一郎 | |
| .. | | 傳染病研究所業務ヲ囑託ス | | |
| | | | 右同人 | |
| 8. 18 | 依願解囑 | | 高瀬仁 | |
| .. 20 | 研究生退學(第二研究部) | | 森岡成一 | |
| 6. 1 | 研究生入學(同) | | 林阿安 | |

21卷(10号)

1937

最高トナリ後漸減スル事ヲ知ツタ。而シテ
同時ニ見ラレタ非定型肺炎患者2例ニ於テ
罹患期ニ於ケル Influenza 病毒ニ對スル血清
内中和抗體ガ異常ニ強ク恢復後却ツテ弱マル
事ハ此ノ肺炎ハ Influenza 恢復期ニ於ケル合

併症ト考ヘラレルト云フ。而シテ Influenza
流行ニ是等病毒及ビ血清ノ検査ヲスル事ハ實
際ノ診斷ヲ助ケルモノデアルト云ツテ居タ。

(大久保)

雜 報

學術集談會

去ル9月16日(木)午後1時ヨリ講堂ニ於
テ學術集談會ガ開催サレ演題ハ次ノ如クデア
ルツタ。

演 題

1. 尿素新陳代謝ニ關スル實驗的研究
齋藤 堯夫君
2. 加熱竝ニX線照射セル諸臟器細胞成分
ノ血像及ビ造血臟器ニ及ボス影響
塚原 國雄君
3. 濟南及ビ青島日本人小學校兒童ノ糞便
檢査成績及ビ文獻ニヨル中華民國ニ於
ケル寄生蟲ノ分布ニ就テ
森下 哲夫君
4. 潜伏微毒。癩。結核及ビ正常血清ニ於
ケル「カオリン」處置血清ヲ以テセルワッ
セルマン反應ノ成績ト他ノ數種微毒血
清反應ノ成績トノ比較 田中 芳雄君
5. ワッセルマン反應陰性潜伏微毒患者ニ
於ケル「サルブールサン」喚起試驗ニ對ス
ル「カオリン」處置 ワッセルマン反應ノ
價值
{ 田中 芳雄君
橋本 康義君
6. 軟性下疳菌ノ生物學的竝ニ臨牀的研究
鈴木餘四郎君
7. 補體結合反應ヨリ觀タル肺結核ノ經過
竝ニ豫後ニ就テ 須賀井忠男君

8. 本邦ニ於ケル傳染病流行ノ時系列變化
其2 循環變化ニ就テ 山岸 精實君
9. 「腸炎菌診斷指針」ノ解説(綜説)

小島 三郎君

學友會へ寄附

- | | |
|-------------|--------|
| 金 14圓 83錢也 | 入田 貞義君 |
| 金 7圓 93錢也 | 戶田 又生君 |
| 金 181圓 42錢也 | 田中 實君 |

人事異動報告 昭12. 10. 2調

- | 發令
月日 | 辭 令 | 官職 | 氏 名 |
|----------|---------------|----------|-------|
| 9. 9 | 傳染病研究所業務ヲ囑託ス | 第二研究部 | 永井 吉郎 |
| .. 22 | 補傳染病研究所所員 | 東京帝大教授 | 太田 正雄 |
| .. 24 | 研究生入學許可(附屬醫院) | | 眞鍋 清明 |
| .. 27 | 歸 朝 | 文部省在外研究員 | 山口 正義 |
| .. 30 | 依願解囑 | | 塚原 國雄 |
| | 任傳染病研究所技手(各通) | | 大林 容二 |
| | | | 中村 孝一 |
| | | | 荒川 清二 |
| | | | 小川 政敏 |
| | | | 池田 庸徳 |
| | 解囑 上5名 | | |

テハ、消滅シナカツタノデアル。

黄熱流行ハ是等ブラジル北東部ノ海岸ノミニ止ドマラズブラジルノ南方各州ヲ除イテハ最初ニ擧ゲタ諸國ノ「ネツタイシマカ」ノ存在ヲミナイ地方ニマテ蔓延シテキル。

ソシテ是等流行地ノ免疫率ハ「ネツタイシマカ」ノ傳播ノ有無ニ起因シテ大イニ變化ヲ示シテキル。

南米ノ太平洋岸或ヒハカリブ海岸ノ重要港市ニ於ケル黄熱ノ最近流行ノ證據ハ何等見出セナカツタ。(森)

南米ベネズエラニ於ケル藪林性黄熱

Benarroch, E. I., Yellow fever in Venezuela in 1929., Amer. Journ Trop. Med., 1937, XVII, 595-604.

1928—1929ニ亙ツテ軽度ノ黄熱ノ流行ガ南米ベネズエラ諸市ニ起ツタ。ソノ中ノGuasipati市テハ149例ノ患者ガ發生シ、内5名ハ死亡シタ。臨牀的ニハゴク軽度ノモノテ特別ナ症状ハ見出セナカツタガ。

極ク少数ノ者ハ黄熱ノ疑問症状ヲ呈シタ。病理變化及ビ血清試験ニヨリ該病ヲ黄熱ト断定スルニ至ツタ。患者血液ヲ以テ海狸及ビ猿ヲ用ヒテノ動物試験ハ陰性ニ終ツタ。

以上ノ事實ハ此ノ地方ニ黄熱ノ沈黙流行焦點ガアル事即チ藪林性黄熱ガコノ地方ニ侵入シツ、アル事ヲ暗示スル。(森)

放線菌溶菌素ノ限外濾過

M. Welch et W. J. Elford., Détermination de la taille des bactériolysines d'Actinomyces par ultrafiltration C. R. de la Soc. de biol., 1937, CXXV, 1053.

ElfordノGradocol膜ニヨリ放線菌ノ溶菌素ノ限外濾過ヲ行ヒ平均ノ大サ4 μ ト測定シタ。コレハSvedbergノ遠心ニヨリ測定シタ卵「アルブミン」ノ大サト同ジデアアル。又コノ溶菌素ハElfordノ術式ノ遠心テハ大サヲ測定シ得ナカツタガ。コレハコノモノガ直径10 μ 以下デアアルコトヲ意味スル。(山田)

雜 報

學術集談會

去ル10月21日(木)午後1時カラ講堂ニ於テ學術集談會ガ開催サレ、演題ハ次ノ如クデアツタ。

演題

1. 日本産鉤頭蟲類ノ數種ニ就キテノ追記
 - { 福井 玉夫君
 - { 森下 哲夫君
2. 青島産鉤頭蟲類ノ研究 森下 哲夫君
3. 「カラ、アザール」(黑熱病)ニ關スル研究(第一報)
 1. 感染経路ニ關スル實驗的研究
 2. 諸種動物ニ於ケル接種實驗

石井信太郎君
4. 實驗的放線狀菌症ノ研究ニ關スル

知見補遺

長谷川秀治君
 宮崎 吉夫君
 中本爲次郎君
 有道 知行君
 秋吉 正豐君

5. 實驗徵毒

先天性徵毒成立機轉ニ關スル實驗的研究 高木 逸磨君

宮川所長一行北支へ出發

今般外務省ヨリ北支ニ於ケル防疫並ニ衛生ニ關スル調査ヲ囑託セラレタ宮川所長、佐藤、小島兩教授、入田、井田兩學士及ビ事務高原書記ノ一行7氏ハ去ル11月12日(金)午後9時40分盛大ナ見送りヲ受ケテ東京驛ヲ出發シタ。

其後ノ本所關係應召者

其後ノ本所關係應召者ハ次ノ如クデアル。

米倉秀雄氏(醫局勤務)

福山榮三氏(第一研究部研究生)

春秋會動物慰靈祭竝ニ

會員送迎會

春秋會デハ例年ノ通り去ル11月6日(土)午後11時30分ヨリ動物慰靈祭竝ニ新舊會員秋季送迎會ヲ舉行シタ。

學友會へ寄附金

- 金 490 圓 76 錢也 石光 薰君
- 金 206 圓 58 錢也 所 敏一君
- 金 4 圓 76 錢也 須賀井忠男君
- 金 32 圓 04 錢也 關根 綱矩君
- 金 18 圓 02 錢也 高須勘次郎君
- 金 13 圓 56 錢也 戶田 又生君
- 金 10 圓 58 錢也 石井信太郎君
- 金 20 圓 52 錢也 内藤 誠一君

人事異動報告 昭 11. 11. 4 現在

發月 令日	辭 令	官職	氏名
10. 11			朝鮮へ出張ヲ命ス

- ” 16 免本官專任傳染病研究所技師 囑託 山田 誠
- 東大助教授兼傳研技師 遠山 祐三
- ” 21 長崎及福岡ノ二縣下へ出張ヲ命ス 助教授 内野 豐生
- ” 長崎縣下へ出張ヲ命ス 技手 大山 西一
- ” 同 ” 中村 孝一
- ” 28 任東京帝國大學助教授 敍高等官五等 從六位 石井信太郎
- ” 補傳染病研究所所員 助教授 石井信太郎
- ” 傳染病研究所業務囑託ヲ解ク 石井信太郎
- ” 第五研究部 寄生蟲學原蟲學主任 昆蟲學研究室 石井信太郎
- ” 30 依願免本官 技手 保坂 一耶
- ” 高知縣下へ出張ヲ命ス 教授 高木 逸磨

實驗醫學雜誌第二十一卷第九號石光論文正誤表

頁	行	誤	正
1003	20	業績表發後	業績發表後
1005	19	Fig. 4b, 5b	Fig. 1b, 3b, 4b
1009 1010 1011		解 譯	解 釋
1016	最終行	Fig. 2, e	Fig. 1e, Fig. 2
1017	1	Fig. 3, a, b, c, d	Fig. 1, a, b, c, d
1023	(附圖説明ノ) 4	向 テ 右	向 テ 左

ハ醫學方面ノ學者デアル C. Oppenheimer 及 L. Pincussen 兩氏デアル。今迄ノ Lehrbuch ヲ Handbuch ノ型ヲ破ツテ生物學一般竝ビニ其ノ研究ニ必要ナル諸學科即チ Hilfswissenschaft ト云フベキ多クノ部門ニ涉ツテ今迄實驗ニヨリテ得ラレタ總テノ數値ヤ恒數ノ中カラ生物學方面ノ研究ニ必要ナルモノヲ選定シテ表ニマトメ之ニ就テノ簡單明瞭ナル説明ヲ加ヘテ10數卷ノ中ニ分類シテ記載サレテ居ル。前述ノ如ク編輯者ハ醫學者デアルガ各部門ノ執筆者ハ各其方面ノ専門家デアツテ掲載セラレタ數値ハ何レモ選定セラレタ最モ正確ナ信頼シ得ベキモノデアル。尙ホ本書内ノ表ニハ必ズ文獻ガ記シテアツテ必要ニ應ジテ原著ヲ參照スル便ガアル。

從來出版セラレテキル此種ノ書籍トシテハ有名ナル Landolt-Börnstein ノ Physikalisch-Chemische Tabellen ガアル。此ノ Tabulae Biologicae ハ生物學ニ於ケル Landolt-Börnstein ナリト評シテ差支ヘ無イト思ハレル。

本書ハ始メ全部テ4卷ノ豫定テ發刊セラレタデアルガ年ヲ追ツテ Ergänzungsband ガ出テキル。即チ第5卷ハ植物學、第6卷ハ動物學ニ關スルモノデアリ。1931年以後ハ毎年1卷宛 Tabulae Biologicae periodicae トシテ supplement ガ出テ 1937年ノ分ヲ加ヘテ全部テ第12卷迄出テキル。

次ニ第1卷ヨリ第6卷ニ至ル各卷ノ内容ヲ摘記ス。

第1卷。物理學及物理化學竝ビニ是等ノ生物學上ニ於ケル應用方面。

第2卷。熱化學。酵素ノ物理化學。電氣及ビ電氣化學。放射線學。生理學各論。分泌物。

第3卷。化學總論。化學物質ノ恒數。器官ノ化學。物質代謝。人體ニ於ケル數値。藥理學。免疫學。

第4卷。染色體數。遺傳學。發生學。趨向性。生體染色。海水ノ恒數。

第5卷。植物學一般。

第6卷。動物學一般。

2. Ullmann Enzyklopädie der technischen Chemie 10卷。

此ノ Ullmann ノ Enzyklopädie ハ化學工業ノ百科辭典トシテ編纂サレタモノデアルガ其ノ内容ハ大仕掛ケナ化學工業ヤ冶金學ニ關スル記事ノ外ニ一般化學藥品。醫療藥品。化學的操作ヲ加ヘテ得ラレタ食品ヤ日用品ニ關スル記事ハ勿論。一般ノ化學的操作法及ビ是等ニ關係アル物理學。物理化學等ニ關スル純學術的方面ノ事モ可ナリ收載サレテ居ル。Enzyklopädie ナル名ニ相應シテ記事ノ項目ハ ABC 順ニナツテキテ自分ニ必要ナル項目ヲ調査スルニ甚ダ便利ニ出來テキル。種々ノ藥品ノ性質殊ニ其ノ合成方法ヤ其他一般ニ衣食住ニ關係アル諸製品中テ化學的操作ヲ加ヘテ作ラレタモノニ就テ知ラント欲スル場合ニ極メテ便利ナル參考書デアルト考ヘラレル。

(内野)

雜 報

學術集談會

去ル11月29日(月)午後1時カラ講堂ニ於

テ學術集談會ガ開催サレ、演題ハ次ノ如クデアツタ。

演題

1. 北支青島ニテ得タル鱗類ノ研究
 - { 尾形 藤治君
 - 森下 哲夫君
2. 痘苗ノ保存ニ關スル研究 矢追 秀武君
3. 吾邦ニ於ケル馬ノ流行性腦炎ノ原因學的研究(續報)
 1. 病毒ノ患馬體內ニ於ケル分布狀態
 2. 野外病馬ノ馬體接種成績
 3. 無症狀感染ニ就テ
 - { 城井 尙義君
 - 佐藤 久藏君
 - 安藤 啓三郎君
 - 大久保 薫君
 - 山田 誠君
4. 跳躍病病毒ノ二三ノ症狀 殊ニソノ免疫學的地位ニツイテ { 三田村 篤志郎君
 - { 北岡 正見君
5. 跳躍病病毒ノ實驗室內感染ノ一例ニツイテ
 - { 三田村 篤志郎君
 - { 北岡 正見君
 - 森 和雄君
6. 日本流行性腦炎病毒ノ蔗糖水内耐久力ニ關スル小實驗 { 三田村 篤志郎君
 - { 北岡 正見君
7. 日本流行性腦炎病毒ノ鶏卵内培養ニツイテ { 三田村 篤志郎君
 - { 小林 英一君
8. 昭和12年夏期ノ日本流行性腦炎患者カラノ病毒ノ分離ニツイテ

脊髓液、血液、口腔液殊ニ屍體臟器ニ關スル成績

 - { 三田村 篤志郎君
 - { 北岡 正見君
 - { 大久保 薫君
 - { 天神 智君
9. 健康人及ビ健康動物ニ於ケル日本流行性腦炎病毒ニヨル不顯性感染ノ證明竝ビニ不全型腦炎ノ存在ニツイテ

健康人及ビ健康動物ノ血液竝ビニ口腔液カラノ病毒ノ分離實驗

 - { 三田村 篤志郎君
 - { 北岡 正見君
 - { 森 和雄君
 - { 小林 英一君
 - { 大久保 薫君
 - { 天神 智君

10. 本邦ノ腦炎流行地竝ビニ非流行地(北海道及ビ樺太)ノ健康人及ビ健康動物血清ノ各種腦炎病毒ニ對スル殺病毒性ニツイテ
 - { 三田村 篤志郎君
 - { 羽里 左衛門君
 - { 北岡 正見君
 - { 渡邊 漸君
 - { 大久保 薫君
 - { 大市 川收君
 - { 天神 智君
 - { 林 敏雄君
 - { 宮澤 武雄君
11. 日本流行性腦炎ニ於ケル血清ノ殺病毒性物質ノ特異性竝ビニ消長ニツイテ
 - { 三田村 篤志郎君
 - { 羽里 左衛門君
 - { 北岡 正見君
 - { 渡邊 漸君
 - { 大久保 薫君
 - { 大市 川收君
 - { 天神 智君
12. 昭和12年夏期ニ於ケル岡山市ノ蚊族ノ季節的消長ニツイテ
 - { 福熊 見 秀 雄 君
 - { 熊澤 澤 興 市 君
 - { 菅田 田 光 三 君
 - { 長畑 山 一 正 君
 - { 景山 山 博 文 君
 - { 關 應 一 君
 - { 秋元 應 惠 夫 君
 - { 森 壽 和 雄 君

醫學生
13. 人工的ニ日本流行性腦炎病毒ヲ感染セシメタ各種ノ蚊ヲ用ヒテノ傳播實驗

附、感染蚊ノ有毒性ニ對スル溫度及ビ吸吮病毒ノ影響ニツイテ

 - { 三田村 篤志郎君
 - { 森 和雄君
 - { 北岡 正見君
 - { 天神 智君
14. 自然界ノ蚊ニ於ケル日本流行性腦炎病毒保有ノ證明

蚊媒介説ノ一新根據

 - { 三田村 篤志郎君
 - { 北岡 正見君
 - { 森 和雄君
 - { 大久保 薫君
15. 流行病學的事項竝ビニ實驗成績カラ見タ日本流行性腦炎ノ感染經路ニ關スル考察
 - { 三田村 篤志郎君
 - { 故山 田 信 一 郎 君

宮川所長歸朝

北支方面＝出張中テアツタ 宮川所長ハ高原
書記ヲ同伴去ル12月12日(日)午後5時20分
東京驛着無事歸朝セラレタ。

其後ノ本所關係應召者

其後ノ本所關係應召者ハ次ノ如クテアル。
石井信太郎氏(助教授、所員)
鈴木 勝治氏(醫局技手)

學友會へ寄附

1金160圓也 前田 幸雄君
1金4圓79錢也 須賀井忠男君

人事異動報告 昭和12.12.10現在

發令日 辭 令 官職 氏名

- 10. 31 依願免本官 技手 池田 庸徳
- 11. 10 傳染病研究所業務ヲ囑託ス
(第二研究部) 小田 通男
- ,, 研究生退學ヲ命ス 同 人
- 11. 12 傳染病研究所業務ヲ囑託ス
(第2研究部) 新井三九雄
- ,, 研究生退學ヲ命ス 同 人
- ,, 傳染病研究所長 宮川米次 中華民國出
張不在中代理ヲ命ス
教授 高木 逸磨
- 11 15 千葉、埼玉及神奈川ノ三縣下へ出張
ヲ命ス 技師 城井 尙義
- 11 26 岡山縣下へ出張ヲ命ス
技手 北岡 正見
- 11 26 同 囑託 森 和 雄
- 12. 1 陞敘高等官五等 事務官 檜山兼次郎

田中論文正誤表

實驗醫學雜誌第21卷第11號

頁	行	誤	正
1485	本文 13	反應度ノ增強ヲ認メ得ル	反應度ヲ增強セシメ得ル
1494	第10表	0.15 0.1 0.05	0.15 0.075 0.05
1495	第11表	0.15 0.1 0.05	0.15 0.075 0.05
1499	第14表	2 2 6	2 4 6
1501	本文 14	働性作用	非働性作用
1507	第22表	1×處置 2×處置 3×處置	1回處置 2回處置 3回處置
1511	本文5及ビ7	(No. 20—	(No. S 20—
1515	,, 8	K-56° テ強陽性	K-56° テ微弱陽性
1521	,, 7	銳敏	銳敏度
1524	,, 4	3例	2例
1527	第38表	198(72.4%)	198(72.0%)
1529	本文下カラ6	= Wa.R.	=非特異的ニ Wa.R.
1530	第40表	a{ c{ d{ b{ e{	a{ b{ c{ d{ e{
1533	本文 4	徽毒血清＝於テ從來ノ正規法	從來ノ正規法
,,	下カラ 11	Fränkel	Fraenkel
1534	14	Frieberger	Friedberger